
夜伽草子

sadaka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜伽草子

【Nコード】

N3095I

【作者名】

sadaka

【あらすじ】

時は平安、都のある山城からは離れた飛騨の深山に人目を忍ぶ邸宅があった。これは寝殿造りに住まう一人の人間と美しき化生どもの夜伽の物語。

睦月、梅（前書き）

史実と設定が混ざっていますので、そういったものが苦手な方はご注意ください。

睦月、梅

時は平安、後一条天皇の御代。都のある山城から北東に位置する飛驒の深山に人目を忍ぶ邸宅があった。西対を省いた寝殿造りに住まうのは『若』と呼ばれる一人の青年。これは人間の男と美しき化生どもの織り成す夜伽の物語である。

山の奥深くにひっそりと佇む邸宅で、寝殿の主である青年は湯帷子姿のまま床に就いていた。風通しのよい寝殿には春の夜風が吹き込んでいて、真黒な青年の髪を撫でるように揺らしている。夜陰において頬の白さを際立たせている彼は『若』と呼ばれる存在である。むろん授かった名ではなく、その名称を口にする人間すらこの邸宅には存在しなかったが、それでも若はゆっくりと瞼を持ち上げた。「……そなたか」

浅き夢から目覚めた若の口唇から紡ぎ出されたのは呼びかける言葉。けだるそうに再び瞼を下ろしてしまいう前に、彼の漆黒の瞳は陽炎のようにぼんやりと立ち上る白い姿を捉えていた。横たわる若の目前に顔を寄せてきているのは唐衣の女人である。だが若の頬にかかる女の髪に色素はなく、また彼女には重さもなかった。

『若、春でございます』

梅の香と共に寝殿へやって来た女は化生であり、名を白はくという。白梅の化生である彼女はほんのりと色づいた肌よりも真白な髪を持

ち、その瞳には虹彩がない。白という呼び名も紅梅と区別するために若が彼女に与えたものであり、元来化生にとって名など何の意味も成さなかった。

「そう急くな。今、起きる」

穏やかな束の間の眠りに心を残しつつも、若は白の求めに応じて仕方なく上体を起こした。肉を持たない白の体を突き抜けてから夜具を退け、周囲を見渡すと、蟬にはすでに火が入れられていて闇に仄かな光を放っている。また月も満ちているようで、人間である若にとっても明るさに不足はなかった。

『若、お召し物はそのままですかい？』

湯浴みをした時の姿のままでいる若に、白が気遣うような言葉を投げかけてきた。しかし言葉とは裏腹に、彼女は嬉しそうに微笑んでいる。妖美な笑みを一瞥しただけで白から視線を外した若は無感動に頷いて見せた。

「すぐ乱れる」

『まあ、そうでしたわね』

唐衣で口元を覆いながらこころと笑い声を立てる白の様は、さながら人間の女房のようであった。彼自身は世俗を目の当たりにしたことがないが夜伽話として女房のことは聞かされているので、想像を巡らせることは出来るのだ。

「白、紅はまだなのか？」

例年、中島に植えられている紅白の梅は同時期に咲き揃う。若の発した問いに他意があったわけではないのだが、それまで鈴のように響いていた白の笑い声がぴたりと止んだ。

『若は年増の白よりも、若輩の紅がよろしいのでしたわね』

あらぬ方向へ顔を背けて拗ねる白に年増などという表現は似合わない。化生に醜い者など存在せず、彼女たちはただ幽玄の美をもつて年輪を重ねるだけなのだ。しかし一度こうなってしまうと、白にはいくら弁解をしても通じない。そのことを心得ている若は小さく息をつき、彼女が待ち望んでいる話題を口にすることにした。

「白、世俗の話聞かせてはもらえないか」

それまで拗ねていた白もこれには目を輝かせ、若の傍へ降り立つ。
『受肉しても、よろしいのですね?』

らんらんと輝く瞳で伺いを立てる白に、若は無言で頷いて見せた。
若の許しを得た白は空中を漂うことをやめ、ゆっくりと畳に足をつける。すると植物が大地に根を張るように足元から、彼女の姿は背後にある景色を通さなくなっていった。

受肉とは、触れることの叶わぬものから触れることが出来るものとなるよう肉体を得ることである。だが受肉をしても化生の風貌はさほど変わらず、白の真白な髪は畳の上を這い、瞳は朱色に光を放っている。さらには紅を引いたような赤い口唇と、同色の長く伸びた爪が、彼女が化生たる証として誇らしげに主張していた。

「若、こちらへ」

肩口から垂れ下がる白髪を後方へ流し、畳の上で正座をした白が己の膝を指す。若は短く息を吐き、それから白の膝に頭を預けた。
白梅の化生からは香よりも控えめであり、それでいて鮮烈な梅の芳香が立ち上っている。梅の香に惑わされた若はまどろむように瞼を下ろしながら口火を切った。

「今宵はどのような話を聞かせてくれる?」

「若は万葉集というものをご存知ですか?」

「聞き覚えがある。確か、歌集ではなかったか?」

「その通りでございます。天皇から庶民にいたるまで、様々な者の歌が綴られておりますわ。歌人の一人、山部赤人やまべのあかひとはこのような歌を詠んでおります」

我也見つ 人にも告げむ 勝鹿かつしかの

真間ままの手児名てこなが 奥つき処

手児名という名称が地名なのか人名なのかも解らなかった若は、その旨を白に問いかけた。すると何故か、白は嘲りを口調に孕ませながら説明を加える。

「身投げをした娘の名ですわ。このような話が残っております」

昔、真間山のふもとに美しく清らかな娘が住んでいた。娘は真間の井戸の水を汲みに毎日里までやって来たのだが、美しい娘を見初めた里の男たちは次から次へと彼女に結婚を申し込んだ。そのことに思い悩んだ娘はついに、真間の入り江に身投げをしてしまったのである。この美しい娘の名が手児名なのだ。

「山部赤人の句は身投げをした娘の墓を訪れた時のもので、挽歌でございます」

「挽歌とは？」

「人の死を悲しむ歌のことでございます。死を悲しむなど、人間とは脆弱で哀れなものですわね」

あからさまに人間を蔑視した白に限らず、化生は人間を蔑む傾向にある。それは彼女達にとって人間が血肉を得るための糧にすぎないからだ、若は理解していた。だが人間は、死を悼む。近しい者はおろか、時には一度も会ったことのない者のためにも涙し、祈りを捧げる。そこには故人の生き様に共感し、尊ぶ精神が内在しているのだ。白はそうした人間の情緒を小馬鹿にしたが、人間である若にはそれが自然で、とても趣がある事柄のように思われた。

「私も人間なのだがね」

若が零した独白は白の意見に反発したという代物ではなかった。ただ彼は、事実を述べてみたくなっただけなのである。そうした若の胸中を汲み取ったとは思われなかったが、白は華のある声で笑っ

た。

「若は、別ですわ」

白の言葉が終わると同時に若の体が、まるで糸に吊られた人形のように傾いた。白の膝の上で仰向けに転がった若の瞳に、化生の妖艶な姿がくつきりと映し出される。

「ときに、若。そろそろよろしいのでは？」

艶やかな紅の口唇が笑みの形に歪み、若は彼女が渴いていることを悟った。白の求めに対して自分が何をしなければならないのか承知している若は彼女に頷いて見せ、それから上体を起こす。まるで自らの身を差し出すかのような仕種で夜具に横たわった若に、白はすぐさま口唇を重ねてきた。

「若、心の臓をいただいてもよろしいですか？」

若は己が身が贅であり、女たちの慰み物でしかないことを、よく理解していた。だがその申し出だけは、即座に断り続けている。

「脾臓をくれてやる。それで我慢をしてくれ」

「脾の臓、でございますか……」

「血を、好きなだけ啜るといい。そなたの紅が真紅に染まるまで」

脾臓と聞いて不服そうな表情をしていた白も、この申し出には嬉しそうに瞳を輝かせた。

「光栄ですわ、若」

横たわる若から少し身を離れた白は彼の目前に皺一つない手の甲を掲げて見せた。彼女の長く伸びた紅い爪は先端が鋭利な刃物のように尖っていて、白はそれを若の首筋へと這わせる。だが引き裂かれた皮膚から鮮血が滲んできて若に痛みはなく、彼は白が血を吸い上げている間、ぼんやりと空を見つめていた。血液は、失っても再びつくられる。しかし失った臓器は戻っては来ず、そうして一つずつ、若は人間でありながら人間ではないものに近付いていくのだ。

「……紅」

若が不意に零した囁きにも似た言葉を聞きつけ、白が嫌そうな表情をして面を上げた。

「厭ですわ、若。わたくしを紅とお間違いになるなど失礼だと思われませんか？」

「紅が、そこにいるのだ」

もともと紅かった口唇も、真白だった髪までもが真紅に染まった白へ向けて、若はやんわりと諭す言葉を口にした。白は重さをまとった上体を起こし、若が示した方向を顧みる。そこでは頬を大きく膨らませた紅が、中空に漂っていた。

『ずるいですわ、白さま。若を独り占めなさるのは他の方々にも反感を買いますわよ』

紅梅の化生である紅は受肉をする前から真っ赤な髪をしており、瞳の色は花粉にも似た黄である。彼女は白よりも歳若いので髪は肩口があり、爪もまださほど伸びてはいなかった。若の上から体を退けた白は子供の形をしている紅を見下すような目で見た後、そっぽを向いて口唇を尖らせる。

「わたくしは夜伽のお相手をしていただけですわ。いつものように」
『それならば私にも資格がありますわ。若、私にも受肉のお許しを』
「まあ、はしたない。少しお控えあそばせ」

『白さまに言われたくないですわ。白さまだってさきほど、若にねだっていたではありませんか』

「ねだってなどいませんわ。失礼な」

『あら？ 私には心の臓をいただけませんかというお言葉が聞こえましたか？』

「盗み聞きですの？ 無礼にも程がありますわね」

白と紅の口論は無意味に、放っておけば延々と続く代物である。夜具の上で体を起こした若は彼女たちに構わず南庭へと目を向け、独白を零した。

「そうか。中島に紅白の梅が咲き揃ったか」

独白の形を借りた若の介入に、白と紅は囁くように言葉を生み出していた口唇を結んだ。彼女たちが大人しくなったことを見て取った若は双方に、柔らかな微笑を向ける。

「朝には庭へ下りてみよう。そなたたちが陽の下で輝く姿を見せてほしい」^{あした}

若のこの言葉は暗に喧嘩をやめろと諭しているようなものであり、彼の意を正しく受け止めた白と紅は口調を改めた。

「もちろんですわ、若」

『お待ちしております、若』

一度は恭しく面を伏せた女たちも、再び顔を上げた時には化生の本質を露わにしていた。彼女たちの内部で生々しく息衝いているであろう衝動を思い遣った若は静かに頷いて見せる。

「肺か腎臓をくれてやる。仲良く分け合え」

己の一言で狂喜する女たちを横目に一瞥し、若は贅となるべく自ら夜具に横たわった。

夜の闇が深かった時代、平安。これは化生とともに生きる一人の青年の夜伽の物語である。

如月、桜

時は平安、後一条天皇の御代。都のある山城から北東に位置する飛驒の深山に人目を忍ぶ邸宅があった。西対を省いた寝殿造りに住まうのは『若』と呼ばれる一人の青年。これは人間の男と美しき化生どもの織り成す夜伽の物語である。

山の奥深くにひっそりと佇む邸宅で、寝殿の主である青年は釣灯籠の下に座りこみ、やり水の傍に植えられた桜を眺めていた。立烏帽子を外した直衣という出で立ちで月明かりに照らされている彼は『若』と呼ばれる存在である。若は己の真の名を知らず、また知る必要も、彼にはなかった。

「……桜」

鳥獣の気配さえ届かない山奥の静謐を破り、若が小さな声で呟きを零した。形の良い彼の口唇から紡がれた言葉は呼びかけるものであり、その呼びかけに呼応するかのように満開の桜の古木が淡い光を帯び始める。ゆらゆらと昇る光はやがて幹から分離して人型を成し、背後に月を映しながら桜色の女が夜に姿を現した。

若の前に現れた美麗な衣をまとった女は足先をゆうに越える長い髪と、長く伸びた爪を有していた。黄緑の瞳は月光に晒されて怪しい輝きを放っており、白に近い淡紅色をしている彼女の髪は重力に従うことなくふわふわと辺りを漂っている。到底人間とは思えぬ容

貌をしている女は桜の化生であり、名をそのまま『桜』といった。彼女の名が安直なのは若が便宜上与えたものだからであり、元来化生には名など何の意味も成さない。

『若、お久しゅう』

淡紅色をしている髪や爪よりも濃い桃色の口唇が、冷ややかに空気を震わせた。底知れぬ冷たさを内在させながら微笑んでいる桜は一瞥するに留め、若は月明かりに照らされている古木へと視線を傾ける。咲き誇った桜は早くも散り急いでおり、白銀の花卉を夜に舞わせていた。

「そなたと共にする刻は、いつも短いものだ」

『いつまでも咲いていれば良いというものではないかもしれませんわ。引き際をわきまえていらっしやらない方がお傍においででは、若もお心が休まらないでしょう』

桜が口にしたことは、つい先日まで若の傍にいた梅の化生に対する皮肉であった。一部の例外を除けば化生どもは我が強く、己を至高の存在だと信じて疑わない。桜の侮蔑もまた、己の取り分が減ることを危惧しているからだ。若は理解していた。そして確かに、先日まで傍にいた梅の化生のせいで若は消耗されているのだ。

『ときに、若。受肉してもよろしいですか？』

桜がさっそく伺いを立てたので若は無言で頷いた。若の意を受けた桜は広廂ひろびやしまで上がってから床に足をつく。そうすることで彼女の体は足元から、背後の景色を通さなくなっていた。

受肉とは、触れることの叶わぬものから触れることが出来るものとなるよう肉体を得ることである。だが受肉をしても風貌はあまり変わらず、彼女が化生であることにも変わりはない。

「若、こちらへ」

桜に畳の上へと誘われた若は、その場で小さく首を振って見せた。「そなたの姿を見ていたい。今宵は高欄こうらんの傍で話を聞かせてくれ」「左様でございますか。それでは、わたくしがそちらへ参ります」すんなりと申し出を受け入れた桜は寢屋で触れ合うことにはさほ

ど興味を示さない性分であり、若にとってみれば幾分、負担の少ない相手であった。広廂ひろげしより一段低くなっている簀子すのこにまで下りた桜は高欄に指をかけ、月が浮かんでいる天空を仰ぐ。桜の細い指から顔へ視線を上げた若はふと、彼女の出で立ちに興味を覚えた。

「桜、そなたの衣は麗容であるな」

「まあ、光栄ですわ。この衣は十二単なる装束を模したものでございます」

「人間の女子おなじが着用するものなのか？」

「内裏に仕える高貴な女子の装束ですわ。天皇に伺候する時には必ず着用するのだとか」

「天皇とは国を治める者、であったな」

「今宵は都のお話になさいますか、若？」

桜に問われた若は微かに頬をすぎる風に舞う花卉に心を奪われながら思案した。月明かりの下で花びらを散らせている古木はその周囲までもを幻想色に染め上げ、幽玄の美を作り出している。散りゆく様がこれほど美しい花は他になく、桜の化生と過ぐす刹那の儚さに思いを馳せた若は彼女自身の話題に言及することにした。

「桜、そなたはどれほどの刻を生きてきたのだ？」

「わたくしは二百年ほどになりましたようか。木之花咲耶姫このはなさくやひめが富士の山頂から種を蒔かれた時より数えれば、まだまだ若輩者ですわ」

木之花咲耶姫という名称を若はこのとき初めて耳にしたのだが、神霊の類であろうということは容易に想像することが出来た。その名の雅なことから美しい女人を思い描いた若は木之花咲耶姫についての問いを重ねる。

「咲耶姫は、現在は何処いずこに居られるのだ？」

若の発言はお目にかかれることを期待してのものではなかったのだが、桜は冷然と嘲るように口唇を引く。

「存じませぬ。興味もありませぬゆえ」

木之花咲耶姫は言わば、桜にとっては母神ともいうべき存在である。そのような人物に興味がないと一蹴してみせた桜の言葉は難解

で、若は少し眉根を寄せた。嘲りを消し去った桜は柔和なまなざしを若へ向け、そのまま諭すように言葉を重ねる。

「若にはお解かりにならないかもしれませんが人間も神も化生も、様々なのでございます」

この邸宅から一步を踏み出すことさえままならない若にとって、桜の言葉は理解しようとすることさえ放棄せざるを得ないような代物だった。桜も別段若に理解を求めているわけではなく、それ以上の説明を加えようとする気配はない。知らないのであればどうすることも無いと思い直した若は桜から視線を外し、彼女を白銀に染めている冷たい月を仰いだ。

「若は月がお好きなのでございますか？」

「なにゆえ、そう思う？」

「先程から桜よりも月をご覧になっておいでです」

「そなたを美しく染め上げる光を、私も浴びていたいのだ」

桜の真意を察した若は不満を和らげるための言葉を素早く返し、それから桜色の化生へと視線を傾けた。若の漆黒の瞳に映し出された桜は、それと分からぬほどわずかに頬を朱に染め、桃色の口唇を笑みの形に歪める。

「それでは、若。このような歌はいかがでしょう」

東の ひむがし 野に炎の かぎろひ 立つ見えて

かへり見すれば 月傾きぬ かたぶ

歌を読む桜の滑らかな声が途絶えたところで、若は思わず東の空を仰ぎ見た。しかし月はまだ中天にあり、朝の光も射してはいない。かきのもこのひとまろ

「柿本人麻呂の句でございます。万葉集に綴られておりますわ」

そ知らぬ顔で注釈をする桜に気取られぬよう、若は密かに息を零した。しかしそれは嘆息ではなく、桜の求めに応じた若は彼女の細い腕を掴み、そのまま肩を引き寄せる。

「柿本人麻呂とは、どのような人物なのだ？」

桜を抱き寄せた瞬間からその香りに酔ってしまった若は瞼を下ろし、うわ言を言うように問いかけを口にした。彼の腕に抱きすくめられている桜は嬉しそうな笑みを零しながら若の問いに応じる。

「持統・文武天皇に仕えた宮廷歌人でございます。天皇を讃える歌や、自然の雄大さを詠んだ歌が万葉集に収められておりますわ」

持統・文武天皇というのがどのような人物で、彼らが治めた時代がどのようなものであったのか、若は知らない。むろん興味はあったのだが桜がすでに血を啜ることに没頭してしまっていたため、若は問うことを諦めた。

化生は、太陽が昇ればその姿を維持していることが出来ない。桜は柿本人麻呂の歌を使って、月が傾く前に贅としての勤めを果たすよう若を促したのである。どれほど雅なことを口にしても、化生は化生でしかない。そう思うと同時に直接求めることをせずに歌で誘うという桜の趣向に、若は歓心していた。

「わたくしを、若の血で美しく染めてくださいませ」

甘美な糧に酔っている桜は恍惚の世界にいる。しかしその科白もまた、月の話をした時に若が躲した言葉に対する返歌のようであった。風情というものを理解している化生に若もまた酔っており、彼は桜がよく血を啜れるよう、華奢な肉体を抱く腕に力をこめる。

「桜、そなたは臓腑を欲しないのか？」

化生の好物は人間の生き血であり、腸はらわたである。だが桜からは腸を欲しいと言われたことは一度もなかった。梅の化生が聞いたら激怒しそうなことではあったが若はだからこそ、彼女になら自ら奉じて

もいいという気になっていたのだ。しかし桜は、吸い上げた血によってほんのりと色づいた面を厭そうに歪める。

「腸は嫌いですわ。臭いのですもの」

化生にも好みというものがあることを知り、若は少しおかしくなった。桜は真紅に染まった口唇を歪めたまま、さも悍ましそうに話を続ける。

「あのような物を好む方の気が知れませんわ。若、下賤の者の要望をあまり聞き入れられるものではありません」

桜の痛烈な皮肉は先日まで若の血肉を貪っていた梅の化生だけに向けられたものではないようだった。その理由に思い当たり、若はなるほどと胸中で呟く。臓物を一つ失うということは、若が一つ人間ではないものに近付くということである。そして若が人間でなくなってしまうばこの甘美な時間も失われ、血のみを欲する桜にとっては損失以外の何物でもないのだ。

（人間も神も化生も様々、ということなのだな）

量らずも桜の意見を理解するに至った若は血の気の失われた口唇で笑みを形作り、再び彼女の体を引き寄せた。

「私が人間である限り、そなたを美しく染めてみせよう。あの月のように」

「光栄ですわ、若」

氷のように冷たい口づけも桜にとっては愛おしく感じられるもので、また若にとっても己の血が染みた口唇を食むことは不快ではなかった。やり水の傍に植えられた桜の古木はその夜、贅の血液を吸い上げて見事な淡紅色に染まったという。

夜の闇が深かった時代、平安。これは化生とともに生きる一人の
青年の夜伽の物語である。

弥生、藤

時は平安、後一条天皇の御代。都のある山城から北東に位置する飛驒の深山に人目を忍ぶ邸宅があった。西対にしのだいを省いた寝殿造りに住まうのは『若』と呼ばれる一人の青年。これは人間の男と美しき化生どもの織り成す夜伽の物語である。

月が中天に昇った弥生の夜、山の奥深くにひっそりと佇む邸宅で青年は北対きたのだいの裏手に植えられた藤を見上げていた。直衣のうしという出で立ちに立烏帽子たてえぼしを被っている彼は『若』と呼ばれる存在であり、二十歳前後と思われる面はとても端麗な顔つきをしている。若の目前では藤棚から垂れた薄紫の花房が月光に照らされて淡い輝きを帯びており、夜の闇に幻想的な光景を作り出していた。

「……藤」

鳥獣はおろか虫の音さえも届かない静寂に、若の零したか細い声が瞬く間に呑みこまれていく。藤の花はただ美しく咲き誇り、森閑をもって若の前に在るだけだ。

「藤」

もう一度、今度ははつきりと、若は藤の花に向かって呼びかけた。しかし藤の花は一向に揺らぐ気配を見せない。この事態を予測していた若は眉一つ動かさずに瞼を下ろし、形の良い口唇から和歌を紡ぎ出した。

霍公鳥 ほととぎす 来鳴き響もす とよ 岡辺なる をかへ

藤波見 ふちなみ には 君は来じとや

歌を読み終えた若は口唇を結び、一抹の不安を抱えたままゆつくりと瞼を上げた。彼の漆黒の瞳に映し出されたものは月下で美しく花開いている藤と、藤棚を背後に透かしながら空中を漂っている女の姿。人間 ひと ならざる者を目の当たりにしたにもかかわらず、若は安堵の息を零した。

「藤」

『そのような歌を、いつ覚えられたのですか』

無表情の内に微かな困惑を孕ませながら若に応えた女は、名を藤という。彼女はその名の通り藤の花の化生であり、淡い藤色の髪と鮮やかな新緑色をした瞳を有していた。だが他の化生とは違い、彼女の髪や爪は人間のものと同程度にしか伸びていない。それは我が強く、他者を蔑む傾向にある化生の中において、藤が異質であることの表れのようなだった。化生にしては珍しく慎ましやかな気性をしている藤は他の化生と顔を合わせることすら嫌い、若が訪れなければ見る者もなくただ花を散らせてゆくのだ。

「雅な歌であろう？ 霍公鳥の啼き声は知らぬがそなたの名があったので、よく覚えていた」

化生の出現するこの邸宅には鳥も虫も飛んで来ない。それでも若が万葉集に収められている読人知らずのこの句を口にしたのは、短

い刻を共にした桜の化生に倣つてのことであつた。彼は直接的に求めるのではなく和歌を読むことで間接的に望みを伝えたのだが、藤は表情にいくばくかの不快を滲ませながらはつきりとした拒絶を示した。

『若、滅多なことは口になさらないで下さい』

藤の険しい語気にも鋭いまなざしにも、強い牽制の念が含まれている。それが何を意味しているのか理解している若は藤の叱責を寂しく受け止めた。

若は、化生にしては人間に近い思考をする藤を好いていた。だがそのような感情は疎ましいのだと、藤には以前にもはっきりと拒絶されたことがあるのだ。それは贅である彼に群がる他の化生との衝突を避けるためのものだったのか、己には人間の情愛など必要ないという化生としての誇りだったのかは、分からない。ただそれでも、若は変わらず藤を好いていた。

「藤、受肉をしてはくれまいか？」

受肉とは、触れることの叶わぬものから触れることが出来るものとなるよう肉体を得ることである。通常であれば化生の方から伺いを立てるものなのだが、藤の花の化生は若の申し出に渋い表情をした。彼女の抱く不快感を少しでも和らげるために若は弱つたように苦笑して見せる。

「碁の相手が欲しいのだ。これはそなたにしか頼めない」

血肉をもった交わりを望まない藤の爪は指の先端をわずかに超える程度の長さしかない。他の化生では爪が長すぎて、碁笥ごけから碁石を持ち上げることさえ出来ないのだ。

『……わかりました。わたくしは先に寝殿へ参つて、準備をしておきます』

囲碁の相手と聞き渋々といった風に頷いた藤は北対を軽々と飛び越え、南庭の方角へと姿を消した。その場に一人残された若は藤の一房に軽く口づけをしてから渡殿わたどのへと向かう。若が寝殿へ戻った時には藤はすでに受肉を済ませており、碁盤を前に静かに座していた。

受肉は空中を漂う化生が地に足をつくことによって成される。しかし肉を得ても姿形が変わるわけではなく、臍の辺りにまで伸びている藤の髪も短い爪も淡い紫色のままである。ただやはり、実体と魂では存在感が違う。藤を間近に感じることの出来る喜びを胸に秘めた若は碁盤を挟んで彼女と向き合い、その毅然とした面を見据えた。

「わたくしが白を持ちます。よろしいですね？」

囲碁では強者が白を持つ。互い先であれば二ギリによって先番を決めるのだが藤は格上の相手であるため、若も異論なく黒を手にした。先手は黒であり、石の詰まった碁笥に若の指が沈む。しばしの沈黙の後、かやの碁盤に石を打つ快音が静かな邸宅に響き渡った。若の一手目は右上隅、小目。己の碁笥に指を入れる前に盤上から視線を上げた藤は、その新緑色の瞳で真っ直ぐに若を射抜いた。

「指導碁でよろしいですか？」

指導碁は対戦ではなく、上手の者が下手の者を導くためのものである。藤の問いかけは日常的な、ただの確認作業に過ぎなかったのだが、若は即座に首を振った。

「対局に応じてくれ」

「本気、でございますか？」

藤が問い返してしまうのも仕方がないほど、若と彼女の間には歴然とした実力の差があった。そのことは若自身にも解っていたが、彼は悠然と頷き返す。

「私が勝ったら、そなたに触れることを許して欲しい」

「何を仰います。人間が化生を食むなど、聞いた例がありません」
呆れたように言う藤の口元には仄かな笑みが上っていた。それは好ましいという柔らかな感情からくるものではなく、冷然とした嘲りからくる哀れみである。その全てを承知した上で、若は虚勢を張った。

「そなたが勝てばよいのだ」

若が口調が挑発的だったため、それまで呆れかえっていた藤もす

つと目を細めて表情を消し去る。

「それでは、わたくしからも条件をつけさせていただきます。勝負とはそういうものですわね、若？」

「聞こう」

「はい。わたくしが勝ちましたらもう二度と、お呼びにならないでください」

藤の申し出は常人であれば躊躇しそうな代物だったが、若はすぐに彼女の条件を受け入れた。勝負に勝てるという自信があったわけではない。ただ贅としてしか生きられない彼は失うことに慣れていたので。

「それでは、参ります」

この一局を互いが勝負と認めたところで、藤は一礼してから碁笥に指を沈めた。藤の一手目は、右上隅小目へのカカリ。通常は隅に布石を打つことから始めるものなので、彼女は序盤から戦いを仕掛けてきたことになる。

(……カカリか)

腕を組んでしばし考えを巡らせた末、若は右上の攻防には手を抜いて他の隅への布石を優先させることにした。しかし藤は、若の着手にことごとく噛み付いてくる。序盤から積極的に戦いを仕掛けてくる彼女はやはり、早々の決着を望んでいるようだった。藤がその気ならばと、若は右上の攻防に手をつけることにした。一隅から始まった戦いはやがて盤全体に広がり、形勢は白有利。藤の力量を持つてすれば若をねじ伏せることなど容易く、勝負は決まったかに思われた。だが終盤になって双方が予期せぬ事態が発生したため、若も藤も動きを止めて盤面に見入る。

「三コウか」

相手の石を取るによって着手禁止の場所に石を打ち込める形をコウという。コウ自体は珍しいものではないが、三コウは稀有な出来事である。長久の歳月を生きる藤でさえ驚愕に目を見開き、石を持つ気になれない様子だった。

「……何か、もの珍しいことが起こるやもしれません」

食い入るように見つめていた盤面から視線を外した藤は独白を零し、裾を払って立ち上がると広廂ひろげさしへ下りて行った。そのまま簀子すのこまで下った彼女が高欄こうらんに指をかけて天を仰いだので、若もゆっくりと後を追う。どちらから言い出さずとも無勝負とすることは、若も藤もすでに心得ていた。

互いの想いを賭けて闘った一局がよりにもよって三コウという形で無勝負となったことに、若は因縁のようなものを感じずにはいられなかった。勝負の行方も想いの行方も、全ては時の運ということなのかもしれない。それならばと、若は静かに口唇を開いた。

藤波の 咲く春の野に 延くずふ葛の

下よし恋ひば 久しくもあらむ

若がこの時を選んで口にしたのは万葉集に収められている読み人知らずの相聞そうもんである。密かな恋の歌に、高欄にかかっていた藤の細い指がぴくりと揺れ動いた。

「若、お戯れは……」

咎めるような表情で振り向いた藤の言葉を、若はもう聞いていなかった。藤の細い腕を引き、そのまま彼女の肩口を抱き寄せた若は半ば奪うように口唇を重ねる。瞠目していた藤も執拗なまでに繰り返される甘い口づけに次第に酔っていき、やがて彼女は贅の糧となるべく臉を下ろして身を委ねた。この夜の営みを他の化生に目撃さ

れていたかどうかは、定かではない。

夜の闇が深かった時代、平安。これは化生とともに生きる一人の
青年の夜伽の物語である。

卯月、あやめ

時は平安、後一条天皇の御代。都のある山城から北東に位置する飛驒の深山に人目を忍ぶ邸宅があった。西対にしのだいを省いた寝殿造りに住まうのは『若』と呼ばれる一人の青年。これは人間の男と美しき化生どもの織り成す夜伽の物語である。

山の奥深くにひっそりと佇む邸宅で、寝殿の主である青年は広廂ひろげしに佇んで南庭にある池を眺めていた。直衣のうしという出で立ちで月明かりに照らされている彼は『若』と呼ばれる存在である。彼の視線の先では池の辺で杜若かきつばたが咲き誇っており、夜の闇に鮮やかな青紫色を溶け込ませていた。

『若』

不意に声が届けられたので、若は池に据えていた視線を上方へと傾けた。彼の漆黒の瞳が捉えたのは背後の風景を透かしながら空中を漂っている女の姿。明らかに人間ひとならざる存在である彼女は青みがかった濃い紫色の髪と花粉のように黄色い瞳を有していた。花の色彩を忠実に表している彼女はあやめの化生であり、名をそのまま『あやめ』という。

先程まで若が眺めていた杜若とあやめは、花の形がよく似ている。だが適地が異なるため、あやめは寝殿からは見えない場所で花を咲かせていた。池の辺に咲く杜若が水を好むのに対し、あやめは乾燥

した土を好むのだ。

「そなたも咲いたか」

あやめが花開いているはずの西へと視線を転じ、若は独白のように呟きを零した。あやめの化生が姿を現したのならば、じき長雨が訪れる。しかしそれはまだ少し先のことであり、伶俐に微笑んでいるあやめの化生を一瞥した若は再び水辺の杜若に視線を戻した。

「杜若はどうしたのだ」

杜若の化生は貪欲で、常ならば花が咲けばすぐねだりにやって来る。それが濃青色の花を咲き誇らせていながら姿を現さないことに、若は訝しさを覚えていたのだった。

『存じませぬ。わたくしにお尋ねにならないでくださいませ』

そっぽを向いたあやめはそれ以上の問答を好まず、早々に寢殿へと上がって行った。その様子が明らかに素知らぬ顔をしている風だったので、若は違和感を抱きながら彼女の後を追う。

『若、受肉してもよろしいですか？』

受肉とは、触れることの叶わぬものから触れることが出来るものとなるよう肉体を得ることである。伺いを立てるあやめに若は無言で頷いて見せた。

あやめの化生が畳に足を着くと、それまで宙を漂っていた彼女の髪が重力に従って下方へと流れた。色彩はそのままに、彼女の髪や体が少しずつ背後の景色を通さないものへと変わっていく。そうして植物が大地に根を張るように足元から、あやめの体は実体化していった。踝まである長い髪をうるさげに退けながら膝を折ったあやめは、その黄色の瞳で若を見上げる。

「若、こちらへ」

あやめに誘われた若は立烏帽子たてえぼしを外し、彼女の膝に頭を預けた。庭を臨む形で横たわる若の白い頬を、長く伸びたあやめ色の爪がゆっくりと伝ってゆく。

「若、お顔の色が悪いですわ。与えすぎなのではありませんこと？」
あやめの言う通り若の肌は蒼白で、口唇の血色も悪い。だが化生

どもに血肉を与えることを勤めとする彼にとって、体調不良は常日頃のことであった。暗に他の化生を非難しているあやめの発言には応えず、若は静かに目を閉ざす。彼が無言を貫いたのは贅であるはずの自身の発言が思いのほか影響力を有していることを承知しているためだった。

「若は伊勢物語なるものをご存知ですか？」

若から反応が返ってこなかったことを気にする風でもなく、あやめはころりと話題を変えた。その執着心のなさはまるで、若との駆け引きを愉しんでいるかのようなのである。次第に心臓へと近付きつつあるあやめの爪に注意を払いながら、若は形の良い口唇を少しだけ開いた。

「歌物語だと聞く。内容は知らぬが」

「伊勢物語とは在原業平ありわらのなりひらと思われる男を描いた短編集でございます。和歌と、歌が詠まれるまでの心の動きや行動が綴られているものですわ」

「在原業平とはどのような人物なのだ？」

「皇統の血筋でありながら臣籍に下った色好みですわ。和歌の名手として僧正遍昭そうじょうへんじょう、文屋康秀ふんやのやすひで、喜撰法師きせんぼうし、小野小町おののこまち、大伴黒主おほとものくろぬしらと共に六歌仙と称されております」

在原業平へいぜいは平城天皇の第一皇子の第五子である。業平の祖父にあたる平城天皇は弟の嵯峨天皇に譲位した後も権威と権力は保持しており、嵯峨天皇が病になると寵愛する藤原薬子らと共に再び権力を握ることを目的にもとの平城京への遷都をはかった。しかし企ては失敗に終わり、平城天皇は出家、第一皇子も左遷という末路を辿ることになる。このため業平なりへいらも在原の姓を賜って臣籍に下ることとなったのだ。薬子の変と呼ばれるこの出来事を、若は無論知るはずもない。だが彼は、皇統の血筋でありながら臣籍に下されたという業平に疎外された者の哀しみを感じた。

化生どもは一部の例外を除き、人間を蔑む傾向にある。あやめは例に漏れない性質をしているため、彼女の冷ややかな言葉の裏には

人間の心の豊かさが隠されているのだ。それを読み取るのが若の唯一の楽しみであり、彼は子守唄を待ち侘びている子供のように歌物語が語られるのを待った。

「今宵は第九段、東下りのお話にいたしましょう」

束の間の静寂の後、あやめはそう言い置いてから昔語りを始めた。ほんのりと色づいたあやめの口唇から、まずは前置きが紡がれる。

昔、男がいた。その男は我が身を役に立たないものと思いこみ、住める国を求めて東国へと旅立つことにした。旅には以前からの友人が同行したのだが、東国へと到る道を知っている者がいなかったために彼らは迷ってしまう。そして旅路の途中で辿り着いたのが、三河の国の八橋やっはしという場所だった。

「その沢には杜若が咲いており、同行の者に促されるまま男はこのような歌を詠んでおります」

唐衣からころも きつつなれにし つましあれば

はるばる来ぬる 旅をしぞ思ふ

在原業平と思われる男が詠んだこの句は長い旅の果てに都へ残してきた妻を想うというものであり、その心情の豊かさに若は深く感じ入った。だが人間の情緒になど関心のないあやめは淡々と話を続ける。

「この歌には五音の題を各句の頭に読み込む、折り句と呼ばれる技法が用いられております。ここでは『かきつばた』ですわね」

男の歌に共感したと思われる同行者達は乾飯かれいの上に涙を落とし、そのため乾飯はふやけてしまった。そこで一区切りがつくらしく、あやめは口唇を結んだ。

素晴らしい作品の余韻に浸る間もなく、若はあやめの真意を密かに考え続けていた。彼女が夜伽話に伊勢物語を選んだことが花を咲かせつつ姿を現さない杜若の化生と無関係とは思えなかったからだ。若の心臓の上に爪を据えたまま黙っているあやめに、自ら胸の内を語ろうとする気配はない。若はもう一度『かきつばた』の歌を思い返し、あやめの真意を推し量った。

「……私に慣れろと申しているのか、あやめ？」

「いいえ。若はすでに与えることには慣れていらっしゃるようにお見受けします。わたくしが申しておりますのは、慣れることによりお忘れになっている事柄があるのではとの愚見ですわ」

「私が忘れていること、か」

「翌年は、藤が花をつけないかもしれませんわね」

ようやく引き出したあやめの真意に、若は嘆きの息を零しそうになった。しかしそれはしてはならないことなので、若はきつく口唇を引き結ぶ。

弥生の夜、若は藤の化生とねんごろになった。その関係は拒む藤を若が強引に誘うことで成り立っており、藤の化生に対する扱いだけが明らかに他の化生とは違うものになっていたのだ。これはその制裁、ということなのだろう。

「罪の意識に苛まれるなど、杜若にも可愛らしい一面があるものですわね」

あやめがついでのように零した一言で、若は杜若の化生が姿を現さない理由を察した。そして女房のようになると笑っているあやめが加担したであろうことを想像するのも、彼には容易いことだった。

化生どもは受肉の際、若に伺いを立てる。しかし若は化生どもの主ではなく、ただの贅なのだ。好意によって成り立っている関係は

ひどく脆く、一時の過ちは取り返しのつかない結果を生む。北対の裏に植えられている藤は、見るも無残な様相を呈していることだろう。その姿を思い浮かべた若は己が忘れていたことを痛烈に実感した。

（与えることが贅としての勤め。欲しては、ならないのだな）

一度瞼を下ろし、再び上げてから、若はあやめの膝の上で仰向けに転がった。彼の漆黒の瞳の中では青紫色の化生が秀麗な微笑を浮かべている。

「ご安心くださいませ、若。化生とはいっしか蘇るものにございます」

肩口から垂れ下がる青紫の髪を片手で退けながら、あやめがゆっくりと口唇を寄せてくる。目を閉ざして口づけを受け入れた若は胸中で、あやめが慰みのように口にした言葉に応えた。人間でいる間に藤を再見することはないだろう、と。

「ときに若、そろそろ頂いてもよろしいですか？」

頃合を見計らって伺いを立てるあやめに若は無言で頷いて見せた。ゆるりと体を起こした若はそのまま夜具へと移動し、自ら仰向けに転がる。後を追って来たあやめは横たわる若の傍らで膝を折り、漆黒の瞳を覗き込みながら言葉を重ねた。

「心の臓を欲しいなどとは申しません。肝の臓を頂いても、よろしいですわね？」

「そなたの好きにするとよい」

「光栄ですわ、若」

鈴が鳴るような華やかな笑い声に乗せ、あやめの爪が若の腹部へと迫る。青紫の異物が体内に侵入してきても若に痛みはなく、それは大きな臓物を取り上げられても同様であった。ただ痛みはなくとも、血と腸の臭気に抗いようのない吐気がこみ上げてくる。人間である若には耐え難い瞬間だったが、化生であるあやめにはそれが非常に甘美なものようだった。彼女は臓物から滴り落ちる血を舐めとり、紅く染まった口唇を笑みの形に歪め、南庭へと視線を傾ける。

「杜若がいつまで耐えられるか見物ですわね、若」

常には賢しさを崩さないあやめも、この時ばかりは化生の本質を剥き出しにする。同意を求められた若は悪趣味だと感じたがすぐさま、元来化生とはそのようなものだと思い直した。

夜の闇が深かった時代、平安。これは化生とともに生きる一人の青年の夜伽の物語である。

皐月、人間来る

時は平安、後一条天皇の御代。源氏の台頭が著しい平安時代の末期である。この頃になると平安初期に設置された検非違使けびいしは衰退し、替わって地方武士が任命される追捕使つうぶしと押領使おうりようしが治安維持を担当するようになった。盗賊や反乱者を追捕するために派遣されるのが追捕使であり、内乱などに際して兵士を統率するのが押領使である。

皐月のある夜、追捕使に追われた盗賊の集団が飛驒の深山に足を踏み入れた。寧猛な獣でさえも縮こまる長雨の夜、彼らは止まぬ雨に体温を奪われながらひたすらに道なき道を上り続けている。この時代の刑罰は身体刑であり、追捕使に捕まってしまうえば杖罪や笞罪は免れないため、彼らは必死で逃げていたのだ。

逼迫した集団の前にやがて、山中には不釣合いな佇まいを見せる邸宅が姿を現した。周囲を立派な築地ついでしで囲まれているその邸宅は寢殿造りで、どうやら貴族の住まいのようである。ひっそりと雨に濡れている邸宅に人気はなく、追っ手と深山の過酷な環境に追いつめられた者達の目にはそこが絶好の隠れ家のように映った。そうして彼らはあまりにも重厚な静謐に包まれている邸宅の異様さに気付くことなく、救いを得た思いで眼下に見えた屋敷を目指したのだった。

都のある山城からは北東に位置する飛驒の深山に人目を忍ぶ邸宅があった。西対にしのだいを省いた寢殿造りに住まうのは『若』と呼ばれる一人の青年である。

長雨が降りしきる皐月の夜、若は釣灯笼つりどうろうの下に座りこみ、濡れそ

ぼつ南庭を眺めていた。そろそろ紫陽花が美しく色づく季節だが、彼の植物は日陰を好むために寝殿からは見えない場所に植えられている。だが冷氣とともに、雨を好む者が若の元へとやって来た。彼の漆黒の瞳が捉えたのは宙を舞う人型の化生である。その化生は長く伸びた藍色の髪を一つに束ねており、水干すいかんという庶民の出で立ちをしているために男女の判別が難しい。だが元来化生には性別など意味がなく、彼らはただただ美しい存在なのだ。

『若、お久しゅうございます』

右腕を胸の前に置いて恭しく一礼して見せたのは、紫陽花の化生である。洒落た挨拶を見せられた若は目を細め、口唇の端を引いて薄く笑みを作った。

「初めて見る衣であるな」

若の言葉に応えるために面を上げた紫陽花の化生は、雨夜の庭を背後に透かしながら優美な微笑みを浮かべる。

『この衣は水干と申すものでございます。先日人里へ下りましたところ白拍子しらびょうしなるものを見かけ、気に入りましたので模して参りました』

「白拍子？」

『白拍子とは今様いまようなどを歌い、水干・立烏帽子たてえぼし・佩刀はいとうの男装で舞う歌舞にございます』

「今様とは？」

『多く、七・五調四句からなる新様式の歌謡にございます』

「そうか。都ではそのようなものが流行っているのか」

一度たりとも赴いたことのない都へ思いを馳せ、若はやまぬ雨を降らす天を仰いだ。紫陽花の化生はそっと、宙を泳いで若の傍へ寄り添う。

『若は都に興味がお有りですか？』

「華やかなのであろう？ 一度は行ってみたいものだ」

『ならば化生になられませ』

紫陽花の化生が口にしたのは極論であり、若は苦笑いを浮かべた。

しかしこの話題にそれ以上の反応を示す気のなかった彼はすぐに表情を消し、さりげなく話を変える。

「都もいいが雨の降りしきる庭も風情がある。それとも、そなたの姿を見に参るか」

『若、雨の夜は庭へ下りてはなりません』

ふわりと宙を漂い、若の眼前に回り込んだ紫陽花の化生は、やや険しさを滲ませる真顔をしていた。彼女の語気も思いのほか厳しいものであり、訝しく思った若は形の良い眉の根を軽く寄せる。若の疑念を察した紫陽花はすぐに表情を一変させ、口元に侮蔑の笑みを浮かべながら真意を明かした。

『土童つちわらに、とって喰われてしまいますよ』

「土童……？」

『卑すだましい魍魎すだまの類でございます』

若には化生と魍魎の違いがよく分からなかったが、明らかに魍魎を蔑視している紫陽花に詳細を尋ねることは憚られた。彼女たちの機嫌を損ねないよう努めている若は興味を抱いた内容にも早々に諦めをつけ、当たり障りのない科白を選んで口にする。

「時に紫陽花、そなたは受肉をしないのか？」

受肉とは、触れることの叶わぬものから触れることの出来るものとなるよう肉体を得ることである。大抵の化生は通常、若の前に姿を現すと彼に願い出る形で受肉を成す。しかし紫陽花の化生は魂のまま空中を漂っているばかりで、伺いを立てようとする気配さえなかった。

『私が受肉をいたしましたしても若に触れることは出来ませぬ故、このままの姿でお相手をさせていただこうと思います』

紫陽花の化生は穏やかな笑みでもって答えたが、その答えを不可解に思った若は小さく首を傾げた。化生によって程度に差異はあるものの、彼女たちは血肉を持った交わりを好む。常日頃から化生に接している若はそう認識していたが、思い返してみれば紫陽花の化生に触れられたことは一度としてなかった。言われて初めてそのこ

とに気がついた若がさらなる疑念を募らせていると、紫陽花が涼しい表情でその理由を明かす。

『私には猛毒が溶けております。ヒトが体内に取り込みますと中毒を起こし、場合によっては死に至らしめてしまうこともありますので、若に触れることは叶わぬ夢にございます』

「……そうであったか」

紫陽花の配慮を初めて知った若は申し訳ない思いに駆られて目を伏せた。自責に揺れている若を見て目を細めた紫陽花は肉を持たない腕を伸ばし、愛しむように優しく若の頬を包み込む。肉感はないものの紫陽花の魂には冷ややかな質感があり、面を上げた若は触れることの叶わぬ彼女の手にと口づけをした。

『愛しい若君。私は若とこうしていられるだけで幸せにございます』

「だが、血肉が欲しいのであろう？」

『他で済ませていきますので、どうぞお気になさらずに』

「……紫陽花、受肉をしてくれ」

触れることが叶わないと分かっていながら若がそのようなことを言い出したので、今度は紫陽花の化生が小さく首を傾げた。若は真意を告げないまま静かに立ち上がり、一度寢殿へと姿を消してから再び広廂へと戻って来る。若の手に握られている物に目を留めて、紫陽花の化生は美しい顔をわずかに歪ませた。

『若、何をなさるおつもりです？』

「触れなければ、良いのであろう？」

鞘を払った小刀を、若は自らの左手に向けた。その仕種で彼の意を理解した紫陽花はすぐさま広廂へと下り立つ。足袋を履いていない紫陽花の素足が床に着くことにより、その姿は足元から背後の風景を通さなくなっていった。受肉を終えた紫陽花は長い藍色の髪を後方へと退け、若の前で跪く。深い藍色の瞳が真っ直ぐに見つめてくるので、若は化生の瞳に映った己を一瞥してから人差し指に刃を押し付けた。

化生に蹂躪される時、若は痛みを感じない。だが自ら刻んだ傷は

痛覚を刺激し、肉を断つ瞬間に久方ぶりの痛みを感じた若は小さく呻き声を零した。端正な顔を痛みに歪めながら、若はじくじくと疼く指先の傷を紫陽花の口元へと近づける。指先から滴った血液が少しだけ開いた紫陽花の口唇から喉を通った刹那、彼女は歓喜に打ち震えた。

「なんと甘美な……これほどまでに違うものなのでございますね」

感涙が紫陽花の白い頬を伝い、彼女は酔いしれているように囁きを零した。小刀を投げ捨てた若は左手の傷を右手で覆い、痛みを気にとられながらも紫陽花へと視線を傾ける。

「ああ……若、私とまらなくなりそうです。今すぐ貴方を引き裂いて腸を貪りたい」
はらわた

うっとりとした表情で見上げてくる紫陽花が熱烈な胸の内を曝け出したので、若はやんわりと苦笑いを浮かべた。

「引き裂くのはよしてくれ。私はまだ人間でいたいのだ」

「これは……私としたことが失礼をいたしました」

口先では詫びながらも藍から朱へと変化した紫陽花の瞳は剣呑な輝きを隠そうとしていなかった。一度火のついてしまった化生を宥める術を知らない若は紫陽花の瞳にぞっとして、傷口を背後にまわしながら一歩ずつ後ずさる。そのたびに紫陽花の化生は一歩ずつ前進していたのだが、しかしふと、彼女は動きを止めた。紫陽花の視線が不意に南庭へと注がれたので、若もつられて雨に濡れた庭園へと目を移す。

「ニンゲン……」

形の良い薄い口唇の端をつり上げ、紫陽花の化生が歪に微笑んだ。彼女の声音は背筋が凍りつきそうなほど悍ましい響きを有していたが、それよりも目の光景に目を奪われている若はあまりの驚きに驚愕以外の感情を喪失させている。虫や鳥さえも居つかない邸宅に何故彼らがいるのかは不明だが、雨に濡れている南庭に確かに人間の姿があるのだ。

「そなたたち……」

高欄^{こうらん}へ指をかけて身を乗り出した若が発した呼び声は、人間たちの叫び声に遮られた。みすばらしい姿の人間たちは一様に紫陽花の化生を指差しており、なかには腰を抜かして倒れこんだ者もいる。しかしすぐ、彼らの恐怖の対象は紫陽花から足元へと移った。雨に濡れた土が次々と隆起して人型を成し、童のような土塊が人間たちの足に群がったのだ。その光景はこの世のものとは思えないものであり、言葉を紡いでいる途中で動きを止めた若は可能な限り目を見開いた。

「若、あれが土童にございます」

説明を加えてくれた紫陽花の口調が至って平静なものだったので、若はぎこちない動作で隣にいるはずの彼女に顔を傾けた。しかし紫陽花の化生は若を見ておらず、熱を帯びた彼女の視線は土童によって雨の庭に引き倒されている人間たちに据えられている。口元に薄笑みを浮かべたまま南庭を眺めていた紫陽花は、やがて我慢が出来なくなった様子で若を振り向いた。

「若、私も行って参ります」

そう告げた時の紫陽花の表情を、若は心の底から忘れたいたと思った。顔を背けた若には構いもせず、紫陽花の化生は雨の中へと身を躍らせる。その場を動くことも出来ずに阿鼻叫喚の光景を目の当たりにしながら、若はぼんやりと弥生の夜を思い返していた。

(……これが、物珍しいことなのか)

弥生の夜、若は藤の化生と囲碁の勝負をした。この対局は稀有な三コウにより無勝負となったのだが、その時に藤が物珍しいことが起こるかもしれないと零していたのである。

生きながら肉を裂かれ、腸を引きずり出されている人間たちは、もはやヒトとは思えない叫び声を放っている。いつかは己も、この人間たちと同じ末路を辿る。誰かにそう言われているような気がして、若は鼻と口を手で覆い隠しながら寢殿の内部へと引き返した。だが御簾^{みす}を下ろしても何も遮ることは出来ず、その夜は臍物の臭気がいつまでも漂い、喚声と悲鳴は人間たちが喰らい尽されるまで南

庭に響き渡っていた。

水無月、朝顔

時は平安、後一条天皇の御代。都のある山城から北東に位置する飛驒の深山に人目を忍ぶ邸宅があった。西対を省いた寝殿造りに住まうのは『若』と呼ばれる一人の青年。これは人間の男と美しき化生どもの織り成す夜伽の物語である。

山の奥深くにひっそりと佇む邸宅で寝殿の主である青年は釣殿つりどのに腰を下ろし、南庭に造られた池に糸を垂れていた。直衣のうしという出で立ちで澄んだ水に目を落としている彼は『若』と呼ばれる存在である。他に人間のいない邸宅では話し相手もなく、若は普段、太陽が昇っている時分にはあまり行動をしない。だがこの日はよく晴れており、水面を輝かせる水無月の陽射しがあまりに美しかったため、彼は珍しく池へと足を運んだのであった。

『若』

何を考えるでもなくぼんやりと水面を見つめていた若は、日中には決して聞くはずのない声を耳にして驚きながら面を上げた。しかし空を仰いだ彼の漆黒の瞳に映ったものは青い空だけであり、他には何もない。

『若、こちらです』

若が困惑していると、先程の声が再び聞こえてきた。それは随分と間近にいる者が発したような大きな声であり、若は目を凝らし

てみる。すると彼の瞳は、今にも陽の光に紛れてしまいそうな淡い姿を映し出した。背後の風景を透かし、空の色彩に溶けてしまいそうになりながら空中を漂っていたのは下げ髪の子である。彼女がおっぱ頭をしていながら唐衣を纏っていたので、その不揃いさに若は眉根を寄せてしまった。

「そなたは何者だ？」

若の発した問いに子は子供らしからぬ優美な笑みを浮かべて応える。

『初めてお目にかかります。私は朝顔と申す者です』

「あさがお？」

初めて聞く名に若が首を傾げていると朝顔は宙を泳ぎ、釣殿の先端を指した。その場所では床を支える柱に蔓を巻きつけた植物が、円錐形に大きく花を開いている。真昼の空と同じ色彩をしている花を見て、若は驚いた声を上げた。

「では、そなたは化生なのか？」

朝顔と名乗った子は驚きを露わにした若に微笑んで見せ、肯定の意を示した。通常、化生は太陽の下に姿を現すことが出来ない。だが朝顔は夜には花を閉ざしてしまうため、昼にしか姿を現すことが出来ないのだと語った。

『時に若、何をなさっていたのです？』

若の傍を離れて宙に舞った朝顔の化生は、彼が手にしている竹竿に顔を寄せながら疑問を口にした。昼間に化生と言葉を交わしていることに若干の違和感を残しながら、若も己が手にしている竿へと視線を転じる。化生の棲む邸宅には鳥も虫も寄り付かず、無論池にも生物はいない。ただの戯れを説明する言葉を持たなかった若は朝顔の問いかけに苦笑でもって応える他なかった。日陰になっている釣殿に上ったことで少し周囲と区別がしやすくなった朝顔の化生は、若から答えが返って来なかったこの意味を察した様子で頷いて見せる。それから、彼女は若に竿を上げるようねだった。不思議に思っているながらも言われるがまま、若は竿を持ち上げる。水面から出現し

た糸の先に真っ直ぐな針がついているのを見て、朝顔の化生はおかしそうに笑った。

『若は、まるで太公望ですね』

竹竿は若がこしらえた物であるが、真っ直ぐな針を使ったことはまったくの偶然であった。若は太公望の説話を知らず、またその名を聞いたのも初めてだったため、朝顔の意図が読み取れずに眉をひそめる。

「太公望とは？」

『太公望とは周の軍師のことです。姓は姜きやう、氏は呂りよ、名は尚しやうまたは望ぼうという人物です』

朝顔の言葉には初めて耳にする名称が数多く登場したため、若はすっかり困惑してしまった。若の理解が追いついていないことを察した朝顔は一度言葉を切り、ゆっくりと説明を加えていく。

『若がいらいしやるこの邸宅は日本という島国の内部にあります。日本の北西には大陸があり、周というのは大陸にかつて在った王朝の名です。太公望という人はその周という王朝の軍師だった人物なのです』

古代、中国には殷いん（商しやう）という王朝があった。殷の三十代目の帝である帝辛ていしん（紂王ちゆうわう）が暴君であったために殷は周の武王に滅ぼされ、周王朝が天下を治めることとなったのである。そうした朝顔の話に若は心を揺り動かされた。人間の持つ知識欲を激しく刺激された若は急いで問いを口にする。

「軍師とはどういったものなのだ？ 何故、真っ直ぐな針で糸を垂れる者を太公望だと言ったのだ？」

子供のような無邪気さで漆黒の瞳を輝かせている若に対し、朝顔の化生は童らしからぬ穏やかさでもって応じた。

『若、一度に訊かれましても一つずつしかお答え出来ませんよ？』

「そうであったな……。ではまず、軍師とはどういったものなのか説明をしてくれ」

『はい。軍師とは、将のもとで作戦・計略を考え巡らす人のことで

す』

軍師の説明に加え、朝顔の化生は牧野の戦いについても触れた。牧野の戦いとは殷の首都である朝歌ちやうかに近い牧野というところで、殷の紂王と周の武王を中心とした勢力が争った戦いのことである。この戦いに敗れた殷の紂王は逃げ戻った王宮に火を放って自害したため、牧野の戦いは天下分け目の一戦と言える。続けて、朝顔の化生は釣りの説話について語った。

『太公望という別名について、このような話があります』

呂望は黄河の支流の一つである渭水いすいで釣り糸を垂れていた時に周の文王に出会い、彼に召し抱えられた。文王は周王朝の創始者である武王の父であり、彼は呂望に出会ったとき「これぞ我が大公（祖父）が待ち望んでいた人物である」と言ったとされている。また呂望は後に齊せいという国の始祖太公となるので、太公望の意は「太公の望」と解するのが自然であるという説も存在する。呂望という人物の別名である太公望という名称がどちらの説によって生まれたのかは定かでないが、若にとつて彼の物語は非常に魅力的なものだった。若の顔色を窺いつつ、朝顔の化生はさらなる話を続ける。

『渭水で釣り糸を垂れていた時、太公望は曲がっていない真っ直ぐな針を使っている、水中にも入れていなかったと聞きます。しかし彼は大魚を釣り上げ、その腹からは六韜りくとうが出てきたのだそうです』

六韜とは、兵法書である。兵法書とは戦争などにおいて兵の用い方を説いた書物のことであり、中国における兵法の代表的古典とされる書物を武経七書という。六韜はその武経七書の一つであるが、これは後世の偽作である。

「それで太公望のよう、か」

壮大な物語を聞き終えた若は感嘆のあまり長く息を吐き、空の遠くへ思いを馳せた。朝顔の化生も口を噤んだため、二人の間にしほしの静寂が訪れる。ひとしきり余韻を楽しんだ後、若は健やかな微笑を朝顔の化生に向けた。

「そなたの話に心が躍った。このような高鳴りを覚えたのは初めて

だ」

『若がお気に召されたのでしたら、私も嬉しく思います』

「そなたに報礼を与えたい。何か、望みはないか？」

夜伽話の後は自らの血肉を持って化生に報礼を与える。そうした関係が当たり前である若にとってこの申し出は至極自然なことだったのだが、朝顔の化生は困ったように微苦笑を浮かべた。

『私はまだ肉を得ることが出来ません。お気持ちだけ、頂いておきます』

化生が血肉を欲する時、彼らは人間に触れることの出来る存在となるために肉体を得る。この行為を受肉と言い、受肉は魂のまま宙を漂っている化生が地に足をつくことによって成される。この邸宅に棲む他の化生は容易に受肉をやったのけるので、若はそれを当然のことだと認識していた。だが朝顔の化生によると、受肉とは母体である植物が土に馴染まなければ出来ないものであるらしい。

『私は大陸から参りましたので、まだこの国の土と同化が出来ないのです』

「それは、どの程度の時間を要するものなのだ？」

『そうですね……私の場合はいと百年ほどでしょうか』

朝顔の化生はさらりと言ったのけたが、気の遠くなるような時間に若は空を仰いだ。そもそも人間と化生では生涯に費やす時間の長さが異なるため、捉え方が違いすぎるのだ。

「百年か……」

化生に食い尽くされずとも、百年後には若は人間ではいられない。自らの血肉を与えることでしか情報を得る術を知らない若は落胆し、肩を落とした。

『若？ どうなさいました？』

「そなたの話をもっと聞かせてもらいたかったのだが無償というわけにもいくまい」

美しい面に暗い影を落とした若とは対照的に、彼の胸の内を聞いた朝顔の化生は明るい笑い声を上げた。

『そのようなことを気にしていらしたのですか。若がお望みとあれば、いくらでもお聞かせいたしますよ』

「だが……私はそなたに何も与えることが出来ない」

言葉を紡ぎながら目を伏せてしまった若の傍へ泳ぎ寄り、朝顔の化生は肉を持たぬ腕を伸ばした。頬に触れた冷ややかさに、若は遠慮気味に目を上げる。すると朝顔の化生は童の顔に年長者の優しさを滲ませて、色彩のない瞳で真っ直ぐに若を見据えていた。

『若、姿は現せずとも私はずっと貴方のことを見ていました。若とお話がしてみたい。成長している間、私はずっとそう願ってきたのです』

対価など求めない、この時こそが幸いなのだと、朝顔の化生は言う。若は化生から好意を向けられることには慣れていたが、好意によって成り立つ関係がひどく脆いものであることも知っていたので何も言うことが出来なかった。

『大陸のお話であれば、他の方々よりも詳しくお聞かせ出来ますよ。若はどのようなお話がお好みですか？』

朝顔の化生が柔和な笑みを見せながら促すので、若の心は激しく揺れた。自戒しなければという思いが胸の片隅にあるのだが、その思いは甘い誘惑を前に静かに崩れ去っていく。欲を満たしたいという衝動を抑えこむことが出来なかった若は結局、化生と付き合うことの難しさを知りながら問いを口にしてしまったのだった。

夜の闇が深かった時代、平安。これは化生とともに生きる一人の

青年の珍しき昼間の物語である。

文月、槐

時は平安、後一条天皇の御代。都のある山城から北東に位置する飛驒の深山に人目を忍ぶ邸宅があった。西対にしのだいを省いた寝殿造りに住まうのは『若』と呼ばれる一人の青年。これは人間の男と美しき化生どもの織り成す夜伽の物語である。

文月の夜、山の奥深くにひっそりと存在する邸宅で青年は西の渡わた殿どのに佇み、屋敷の南に造られた庭を眺めていた。直衣のうしに立烏帽子たてえぼしといった出で立ちの青年は寝殿の主であり、彼は『若』と呼ばれる存在である。若の漆黒の瞳が見据えているのは池を背に白い花を咲かせている槐の木であった。槐は惜しみなく降り注ぐ月光を満身に浴び、妖艶な輝きを放っている。やがて蝶形の花が一つ落ち、地に着く前にひらひらと空中を漂い始めた。

「槐」

若の形の良い唇がその名を紡ぐと、樹から落ちた槐の花が屋敷の方へやって来た。目前で輝きを放つ小さな花を誘導するように若は渡殿を東へと進む。寝殿へ戻ってから、若は改めて槐の花と向き合った。

この屋敷に住んでいる人間は若一人だけであり、ここには人間はおろか獣や鳥さえも訪ねては来ない。そのような環境に身を置いている若の元を訪れるのは化生だけであり、光りながら空中を漂って

いる槐の花も化生である。通常であれば化生は若に伺いを立ててから肉体を得るものだが、槐の化生は少々勝手が違っていた。化生は大概が高慢であるが、その中でも槐の化生はひとときわ氣位が高いのだ。そのため肉体を得るまでは人型にもならず、こうして花の姿のままなのである。槐が白い花を咲かせると迎えに行き、寢殿へ誘ってから肉体を得てくれるよう頼むまでが、若が文月の夜に行う一連の動作となっていた。

「槐、受肉をしてはくれまいか？」

受肉とは、化生が触れることの叶わぬものから触れることが出来るものとなるよう肉体を得ることである。若のこの言葉を聞いて初めて、空中を漂っていた槐の花は地へと落ちた。板を張った床に触れた小さな花は光を保ちながら人型へと変貌を遂げる。肉体を得た槐の化生は床を這う真白な髪と新緑色の瞳を有しており、その美しい面にはふてぶてしさを思わせる笑みを湛えていた。

若の元を訪れる他の化生は身なりに気を遣っていることが多いが、槐の化生は肉を得た体に薄布を一枚巻きつけているのみである。着飾ることも女人であることを強調する卑猥さも意味合いは同じなのだが、半裸の槐を目にした若はその露骨さに嘆息しなくなってしまった。しかし若は、胸裏を面に表すような愚かな真似はしない。若が無反応でいると槐の化生は女房のようになると笑い声を立てた。

「若君、妾と刻を共にしたいと申されますか」

槐もまた他の化生と同じく血肉を欲するが、彼女にとって大切なことは下等な人間の方から誘われたという建前なのである。傍から見れば槐の発言は傲慢以外の何物でもなかったが、若は化生の誇りというものを理解しているので特に不快を抱いたりはしなかった。なにより彼は、化生と共に在ることに慣れているのである。

「槐、そなたに夜伽話を聞かせてもらいたい」

申し出を受けた槐は駄々をこねる幼子をあやす時のように仕方のなさそうな表情を若へ向けた。

「若君は昨今、大陸に興味をお持ちのようですね」

「そなたも大陸からやって来たのか？」

水無月に朝顔の化生から大陸の話聞いて後、関心の高まっていた若は槐の思わせぶりな発言に食いついてしまった。若が瞳を輝かせたことに気を良くした槐はすっと目を細め、高慢な笑みを浮かべて頷く。

「妾は尊貴。人間どもは妾を崇め、平伏するのが常です」

槐の物言いは若に敬うことを求めていたが、如何せん、無知な彼には作法が分からなかった。弱りきった表情を浮かべる若を横目に一瞥した槐は大袈裟に肩を竦めて見せ、それから気分を変えるように畳を指し示す。

「若君、夜伽話は横になって聞くものですよ」

真白に彩られた槐の長い爪が導く床は生々しく、夜伽話の後を思った若は躊躇いを見せた。だが槐の機嫌を損ねれば大陸の話聞けなくなってしまうので、若は憂鬱を振り払って立烏帽子を外す。次に衣を脱ぎ、肌衣のみとなった若はゆっくりと床に体を横たえた。

「これで良いか、槐？」

「ええ。良い姿ですよ、若君」

槐は口唇の端を引いて微笑み、横たわる若の傍に座して詩を読んだ。

花間 かかん 一壺の酒 いっこ

独酌 どくしゃく 相親しむもの無し

杯を挙げて明月を迎へ

影に対して三人を成す

月既に飲を解せず

影徒だ我が身に随ふのみ

暫く月と影とを伴ひ

行樂須く春に及ぶべし

我歌へば月徘徊し

我舞へば影零乱す

醒むる時は共に交歓し

酔うて後は各々分散す

永く無情の遊を結び

相期す 雲漢の遥かなるに

「李白の月下独酌其の一です。若君のお気に召しまして？」

月下独酌は漢詩であり、若が今まで耳にしてきた和歌とは形式からして違う。まして若は大陸の歴史というものをまったくと言っていいほど知らず、李白という名も初めて聞くものであった。そのような状態で感想を求められた若は困りながら言葉を紡ぐ。

「美しい響きであるな。だが槐、私は無知だ。少し補足してもらえるとありがたい」

「若君は人間ですから仕方がないですね」

人間というものを無知であると解釈した槐は哀れみの視線を若へ落としてから補足を口にした。まず漢詩とは一句が四言か五言、または七言からなるのが普通であり、その他にも様々な規則が存在する。また古詩、樂府、絶句、律、排律などの種類があり、月下独酌其の一は五言古詩である。次に李白とは盛唐期の詩人であり、一時期玄宗皇帝に仕えた他は放浪の人生を送った人物である。酒、月、山を好んで詠み、彼は道教的幻想に富む作品を多く残した。

槐の補足は若にとって真新しい知識であり、彼はますます大陸の話にのめり込んでいった。李白という人物を少し知った若は月下独酌にさらなる関心を抱き、槐に解説をしてくれるようお願い出る。せがまれた槐の化生は大袈裟なため息を吐いてみせたが、しかし彼女は若のために解釈を加えた。

「花の間にある酒壺ひとつの酒。飲み友達もいないので杯を高く挙げ、月を招き寄せた。自分の影とも向き合い、これで三人連れになった。だが月は酒が飲めないうえ、影はただ私の動きに従うのみである。でも仕方がない、暫くは月と影と共に短い春を楽しもう。私が歌えば月は降り注ぎ、私が舞えば影は乱れ動く。まだ正気のうちはこうして共に楽しんでいるが、酔いつぶれた後では月は沈み影は消え、それぞれに散り散りとなってしまう。こうした世間のような無情の付き合いを、私は永久に続けたい。そして月よ、いずれは君と遙かな天の川で会うことを約束しよう。と、いう意味の詩です」

説明を終え、歌うように言葉を紡いでいた槐が口唇を結ぶ。話の途中で体を起こしてしまった若は月下独酌の余韻を楽しみながら月の光が注ぐ南庭へと目を向けた。寂しい一人酒も李白にかかれば幻想的な光景へと姿を変える。情緒豊かに独り身を詠みきった李白の感受性に若は激しく心を揺り動かされたが、槐は皮肉な笑みを浮かべた。

「同類のいない男が己を慰めるために作った詩です。お気に召しますか？」

槐の一言は少なからず若の興奮を萎えさせた。だが心の移ろいを悟らせないよう平静を務め、若は槐を顧みる。

「槐、天の川とはどういったものなのだ？」

「星が集まって川のように見えるものです。空をご覧あそばせ」

「そうか。では、庭へ下りてみよう」

天の川に興味を引かれた若は立ち上がろうとしたのだが、槐の白い腕がそれを制した。新緑色をしていたはずの槐の瞳までもがすでに白色に染まっていることに気がつき、若はその場で踏み留まる。若の漆黒の瞳を射抜いた槐は卑猥に口唇を歪ませ、欲望を露わにした。

「天の川をご覧になる前に、若君にはすべきことがあるのでは？」

「……そうであったな」

人間である若がこの屋敷に一人で住んでいるのは、彼が贅だからである。若は己が化生たちの慰み物であることを承知しているので、槐の要望を受け入れて再び床に横たわった。

肌衣のみで仰向けに転がる若の上へ、槐の化生はすぐ馬乗りになった。若の体と重なった槐の身体の部位は次第に融けてゆき、若から瑞々しい精気を吸い上げていく。この行為は血肉を与えることとは違って気力を消耗するので、若の漆黒の瞳は虚ろに揺らいでいった。

「若君、その表情は魅力的です。このまま殺してしまいたいほどに」
首筋を滑る槐の口唇から紡がれたのは凶暴でありながら艶美でもある囁きだった。甘美でいて荒々しい槐の化生に翻弄された若は浅い呼吸をくり返し、口づけを浴びるたびに美しい面を少しずつ歪めていく。女人を象る化生はこうして男の心を弄びながら精気を秘奥へと吸い上げることが常であった。

その夜、若の精気を吸いすぎた槐の木は肥えすぎたために花を散らした。木の下には白い花が幾つも重なり、まるで雪が降った後の

ようであつたという。

夜の闇が深かった時代、平安。これは化生とともに生きる一人の
青年の夜伽の物語である。

葉月、曼珠沙華

時は平安、後一条天皇の御代。都のある山城から北東に位置する飛驒の深山に人目を忍ぶ邸宅があった。西対を省いた寝殿造りに住まうのは『若』と呼ばれる一人の青年。これは人間の男と美しき化生どもの織り成す夜伽の物語である。

葉月の夜、山の奥深くにひっそりと佇む邸宅で青年は床についていた。静まり返った寝殿には虫の声すらも届かず、彼は独りきりで瞼を下ろしている。

肌衣一枚で横たわっている青年は寝殿の主であり、彼は『若』と呼ばれる存在である。眉目秀麗な若の面は先行きが長くない病人のように生白く、二十歳前後と思われる彼の体は年齢のわりに痩せ細っていた。これが貴族の屋敷であれば祈祷によって病を払おうとするところであるが、生憎この屋敷には若のために祈祷を行う者など存在しない。だが病床に伏している若の元に、弱った人間の顔を好む者が訪れた。

『若』

己を呼ぶ涼やかな声を聞いた若は薄っすらと目を開けた。彼の漆黒の瞳が捉えた姿は天井を透かしながら目前を浮遊している赤い女。「そなたは……」

形の良い若の口唇がわずかに開き、か細い声を発した。真紅の長

髪を空中に漂わせた女は優美な笑みを浮かべて応える。

『曼珠沙華にございます。秋になりましたので急ぎ、若の元へ参りました』

燃える炎のような真紅の髪に色彩のない瞳といった容貌の女は彼岸花の化生である。彼岸花には異名が多いが当人は曼珠沙華を名乗り、若は彼女のことを「いちし」と呼んでいた。「いちし」は万葉集に収められている歌に詠まれている花であり、彼岸花ではないかと言われている。若は目前を漂う曼珠沙華の姿をしばし見つめていたがやがて、応じなければならぬことに気がついて口唇を開いた。「……そうか。もう秋なのだな」

寢殿を吹き抜ける風が冷たいものであることに思い至った若は囁くように呟きを零し、再び瞼を下ろした。今の若には起き上がることはおろか、目を開けていられるだけの体力も残っていないのである。

「すまない。今宵は起き上がれそうもない」

弱々しい謝罪を聞きたいちしは深い哀れみのまなざしを若へ向けた。真紅の髪を舞わせながら空中を泳いだいちしは横たわる若の傍へそつと降り立つ。

『若はいつでもそうですのね』

耳元で皮肉をたっぷり含んだいちしの声でしたので若は苦笑を返そうとしたのだが、彼の白い頬はぴくりとも動かなかった。例年、文月に現れる化生が強欲であるため若は葉月のうちは床についていることが多い。従って、いちしは若の寝姿ばかりを目にしているのである。これではいちしが不満を抱くのも当然であるが、若には拒むことなど出来はしないのであった。

広大な屋敷に独りきりで住んでいる若は化生に捧げられた贅である。夜毎化生に生き血を与え、臓物を食まれ、生気を奪われることが務めである若は、己が拒絶を口にしてはならないことをよく承知していた。せいぜい代替を申し出ることが若に許された細やかな自衛の手段なのである。だがいちしには代替として与えられそうなも

のも見当たらず、わずかに残された気力を振り絞って瞼を上げた若は彼女の瞳を見つめながら精一杯の謝罪を口にした。

「すまない、いちし」

彼岸花の化生は確かに怒っていたが、若の真っ直ぐな瞳に射抜かれると渋々といった具合に無表情を崩す。

『若は特別ですもの。許してさしあげますわ』

「特別？」

再び瞼を下ろしながら問いを口にした若の上方へと移動し、いちしは愛おしむ微笑みを浮かべながら彼の面を覗き込んだ。

『特別、美しいですわ』

囁くいちしの口唇が、若の口唇を掠め取る。だが肉を持たないいちしの口付けは、若には冷気が触ったとしか感じられなかった。若の美しい寝姿に気を良くしたいいちしは上方から彼を觀賞したまま夜伽話を始める。

『若、大陸のお話などいかがですか？』

いちしの誘いに興味を惹かれた若は、しかし目を開けることも出来ぬまま血の気の失せた口唇を開く。

「そなたも、大陸から参ったのか」

『はい。私はこの国にある全ての曼珠沙華の母にございます』

日本に存在する彼岸花は遺伝的に全て同一であり、中国から伝わった一株の球根から株分けの形で広まったと考えられている。そのようなことなど知らない若は平素であれば詳しい説明を求めるところなのだが、今宵は思いが及ばなかった。若は閉口したものの話に耳は傾けており、その気配を察したいいちしは澀みなく言葉を重ねる。『若は李白をご存知ですわね。今宵は李白のオトモダチである杜甫のお話にいたしましょう』

李白とは盛唐期の詩人である。杜甫も同時期の詩人であり、彼は李白より十一歳年下であった。そういった簡単な説明を加えてから、いちしは杜甫の詩を読んだ。

死別は已すでに声を吞むも

生別は常に惻惻そくそくたり

江南は瘴癘しょうれいの地

逐客ちくかく 消息無し

故人 我が夢に入り

我が長く相憶おもふを明かにす

恐らくは平生へいぜいの魂こんに非あらじ

路遠くして測る可べからず

魂来るとき楓林ふうりん青く

魂返るとき関塞かんさい黒し

君今 羅網らもうに在り

何を以て羽翼うよく有るや

落月らくげつ 屋梁おくりように満つ

猶なほ疑ふ顔色を照らすかと

水深くして波浪濶ひろし

蛟龍こうりゅうをして得えしむる無かれ

いちしが若に聞かせたのは「李白を夢む」という杜甫の詩の二首のうちの一である。杜甫は李白を敬愛しており、この詩の他にも多く李白を思い、その身を案じる詩を残している。そうした小話を交えながら、いちしは続けて詩の解釈を若に伝えた。

『死別というものは悲しいものだが生別もそれに劣らず、常に心を痛めるものだ。江南は毒気の立ち込める土地だと聞くが、そこに追放されている李白の消息が分からない。だがその旧友が私の夢に現れた。これは私がいつも李白を思っている証だろう。私の元を訪れた李白の魂は平生のものではないようだったが彼がいる場所はあまりに遠く、確かめようもない。李白の魂は楓林の青い江南からわざわざここまでやって来た。そして彼の魂が帰ったあとは、私のいる秦州はただ黒々と暗いばかりだ。君は今囚われの身となっているのに、どうして翼を得てここまで飛んで来ることが出来たのか。君の魂が去ったあと落ちかかっていた月の光は梁を満たし、今も君の面影がそこに照らし出されているような気がする。君のいる南方の地は水が深く、波浪も果てしない所だ。どうか君が、害せられることがないように。』という内容の詩ですわ』

この時、李白は心ならずも朝廷から謀反の罪を得て流罪となっていた。杜甫はそうした李白の身を案じていたのである。若はそういった事情は知らなかったが、李白を思う杜甫の心に確かな友情を感じた。

「この詩が詠まれた後、彼らは相見えることが出来たのか？」

『いいえ。若い頃に別れたきり、再会することはなかったようですわ』

「……そうか」

杜甫の心痛に思いを馳せた若はやるせない気持ちに襲われた。奔放に生きる化生とは違い、様々なものに縛られる人間は哀しい生き物である。だが不自由であるからこそ痛みが分かり、胸を焦がし、必死に生きようとするのだ。人間にしか持ち得ないそうした想いは儚くも美しいと、若は密かに胸中で呟きを零した。

『若、些細な趣向を思いつきました。受肉の許可をいただけませんか？』

唐突ないちしの申し出を、若は考えることもなく承諾した。地に足をつくことで肉体を得た彼岸花の化生は血の気ない若の口唇に指を寄せる。

「若、口唇を開いてくださいませ」

いちしに言われるがまま若はわずかに口唇を開いた。その隙間から入り込んだいちしの細い指が、若の舌にそっと触れる。刹那、目を閉ざしているはずの若の視界が急激に開けた。若が目にしたものは幅の広い川と、岩石が転がっている河原であった。川の辺には真っ赤な彼岸花が群生しており、風もないのに揺れている。誰に教わったわけでもなかったが、若はこの風景が何であるのかを本能的に理解していた。

病の肉体を離れて三途の川を見に行く、それがいちしの言う「些細な趣向」だったらしい。だが殺風景な周囲を見回してみても、その趣向を思いついた者の姿は見えない。若は川の辺で燃えるように咲き誇っている彼岸花を一瞥した後、その手前にある水面へと視点を定めた。

（あの川の向こう側で、彼らは出逢えたのだろうか）

若が佇んでいるのは此岸であり、彼には彼岸のことは分からない。だがきつと、彼岸には安息が待っているはずなのだ。ならば心を痛めるようなこともないはずであり、杜甫と李白もあちら側で再会を

果たしたのだろう。光る水面を見つめながら、若はぼんやりとそんなことを思った。

（私にも、友と呼べる人がいてくれたなら……）

杜甫と李白の温かくも悲しい友愛に心を動かされた後だけに、どうしてもそう考えずにはいられなかった。美しくも侘しい風景がそれまで気がつきもしなかった孤独を実感させ、若の頬を一筋の涙が伝う。河原を吹き抜ける無情な風は川の辺で美しく花開いている彼岸花をゆらゆらと揺らし、不均衡に積みあがっている小石を崩れさせ、やがては若の涙も乾かしていった。

夜の闇が深かった時代、平安。これは化生とともに生きる一人の青年の夜伽の物語である。

長月、人間再来

時は平安、後一条天皇の御代。京の都では国風文化が花開いた、貴族達の華やかな時代である。山紫水明の山城盆地に住まう貴族達は粗野な自然から遊離した華やかな都の中でこそ自然を愛しみ、季節の移ろいや変わりゆく人の心を情緒的に表現した。しかしこの物語の舞台は貴族達が独自の文化を生み出した京の都ではなく、都の華やかさからはかけ離れた飛驒の深山にひっそりと佇む寝殿造りの邸宅である。

山の奥深くに人目を忍ぶように存在するその邸宅は、平素であればおとなう者などありはしない。それは人間に限らず、鳥獣もまた然りである。だが長月のある宵、飛驒の山中には人間の姿があった。月明かりに照らされた二つの人影は目的意識を持って道なき道を進んでいる。そして山中には似つかわしくない寝殿造りの邸宅を眼下に捉えた時、彼らは歩みを止めて異様な雰囲気漂わせる邸宅を観察するように見入ったのだった。

山の奥深くにひっそりと佇む邸宅で、寝殿の主である青年は雲一つない天を仰いでいた。中秋観月は過ぎたものの長月は虚空に浮かぶ月が美しい季節であり、冴え冴えとした月光が青年の白い頬に差している。直衣のうしという出で立ちで広廂ひろげさしに佇んでいる彼は『若』と呼ばれる存在である。無論その呼称は親から授かったものではなく、

若自身も己が何者であるのか知らない。人間も獣も寄り付かない邸宅においては自身の出自を知る術がなく、また知ろうと思うことから無意味なのだった。

この邸宅では平素、夜になると人間でない者が若の元を訪れる。だが今宵は来訪者がいる気配もなかったため、若は寢殿の南に広がる庭に視線を転じて嘆息した。彼の唯一の娯楽は人外の者から見返りとして与えられる夜伽話である。今宵はそれがないため、若は秋の夜長をどう過ごしたものと途方に暮れていたのであった。

暇を持て余した若は夜風の冷たさが障ったので寢殿に戻ろうと踵を返した。しかし視線のようなものを感じ、すぐに足を止めて後方を顧みる。振り向いた若が目にしたものは庭に落ちてゐる小さな影であった。月明かりの只中にちよこんと座している珍客は猫と呼ばれる動物である。若は猫を目にするのが初めてということもあり、その場に立ち止まったまま呆然と珍客の姿を見つめていた。

月光を満身に浴びながら南庭に座していた黒い猫は、やがて若の方へと歩み寄って来た。その動きを目で追っていた若は、猫が簀子にまで上がってきたので驚きを露わにする。しかし面を上げた猫と目が合った刹那、若の心は自然と平静に戻っていった。静謐を湛えているような猫の瞳は金色をしており、そのことが若に月を仰いだ時のような静けさを与えたのである。とはいえ未知の物体であることに変わりはなく、若は一定の距離を保ったまま行儀よく簀子に座している猫に話しかけた。

「そなたは何処から参ったのだ？」

化生と共に生きる人間である若は猫もまた化生であると考えたのであった。だが黒猫は答えず、人語を理解しているのかも定かではない。ふと、皐月にも迷い人があったことを思い出した若は急いた気持ちになり、再び猫に声をかけた。

「ここはそなたのような者が訪れる場所ではない。疾く、帰るといい」

猫は若に応えるように鳴き声を発し、長い尾をぴんと立てて動き

出す。猫が門のある西の方角へと歩き出したので、その丸い背中から視線を外した若は寢殿へ戻るために踵を返した。しかし再び鳴き声が聞こえてきたので、若は慌てて背後を振り返る。すると簀子から庭へと下りた猫が、その金色の瞳で真っ直ぐにこちらを見据えていた。

猫は、若が寢殿へ戻ろうとすると鳴き声を上げるといふ動作を繰り返した。同じ仕種を幾度か目にするうち、猫の意図を理解した若は周囲に気を配りながら庭へと下りる。若がそうすることを待ち望んでいたかのように、猫は彼を誘導する形で歩き出した。そうして辿り着いたのは、屋敷と外の世界を隔てている築地が途切れる西門であった。

猫と同時に歩みを止めた若は目前に立ちはだかった門を重苦しい気持ちで仰いだ。固く閉ざされた門は若が人間である限り、彼に道を開くことはないだろう。そう思い込んでいた若にとって、その強固な門が外側から開かれたことは驚愕に値した。しかも扉の外には、人間の姿があったのである。敷居の向こう側に佇んでいた二人の間は一方が大柄、一方が小柄であり、彼らは共に狩衣かりぎぬという出で立ちをしていた。立烏帽子たてえぼしを被った人間達は貴族であるが、人間の装束に詳しくない若にはそのようなことを知る由もない。貴族達は若を観察するように視線を走らせていたが、それも束の間のことであり、やがて大柄な男が人好きのする笑みを浮かべた。

「これは、お美しい若君だ」

驚きのあまり言葉を失っていた若はその一声で我に返った。人間達の視線が紛れもなく自身に向けられていることを認識した若は困惑しながら言葉を紡ぐ。

「そなた達は一体……」

「説明は後ほどいたします」

小柄な者が余計な会話を嫌うように遮ったので、大柄な男を仰いでいた若はそちらに目を向ける。硬質な声音は女のものであり、若は改めて見た小柄な者が男装している少女であることを知った。少

女は大柄な男に屈むよう指示を出し、袖から取り出した和紙を男の立烏帽子に貼り付ける。少女が言葉を紡ぐと和紙に描かれた文様が光り出したが、奇異な出来事はすぐに収まった。

「式が誘導いたします。札が剥がれないようご注意ください」

大柄な男にそう言い置いてから、少女は足元に目を落とした。彼女の傍には若を西門へ誘った黒猫が控えており、猫は少女の意を受けて歩き出す。同時に大柄な男もまた、猫に従って屋敷の中へと歩を進めた。

「若君、こちらへ」

男が門をくぐった刹那、少女が立ち尽くしていた若の腕を引いた。男と入れ替わる形で敷居を跨いだ若は瞠目する。この時、彼は初めて屋敷の外へ出たのであった。

呆然と立ち尽くす若を尻目に、少女は手早く門を閉ざした。慣れぬ外気に晒された若は閉ざされた門を振り返った後、困惑しきった面持ちを少女に向ける。

「そなた達は人間、なのか？」

「人間にございます。私は陰陽寮の修習生、屋敷へ参ったお人は藤原北家に連なるお方にございます」

陰陽寮とは律令制における八省の一つである中務省なかつかさしょうに属する機関の一つである。陰陽寮には陰陽道に基づく呪術を行う陰陽師がおり、さらに陰陽師を養成する者や占星術を行使・教授する博士なども在籍している。また藤原北家とは藤原不比等ふひとの次男である藤原房前ふふさきを祖とする家系であり、藤原氏は平安時代に栄華を極めた貴族である。だが世情に疎い若には少女の説明を半分も理解することが出来なかった。自身の置かれた状況を何一つ把握出来ないままにいる若はさらなる説明を求めたが、少女は小さく首を振る。

「申し訳ございません。時間がないので手短に話をさせていただきます」

少女が早くに話を切り上げようとしているのには理由があった。それは山中に存在する邸宅が化生の巣窟となっており、彼らにこの

逢瀬を知られてしまえば大変なことになってしまふからである。

少女達は若を都へ迎えるためにやって来た使者である。本来であれば若と出会ったこの夜に彼を導かなければならなかったのだが、予想以上に物の怪の力が強すぎた。そのため勅命を果たすことを断念した少女は、せめて若と話だけでもしておこうと思ったのである。若と話をするためには化生の支配下にある邸宅から連れ出す必要があり、そのため少女は同行者である男を身代わりとすることで化生の目を欺いたのだった。だが呪力を込めた札の力は一定の時間しか効果がない。若はそのような事情など知らないが、少女が真剣な表情をしていたので黙って話を傾けることにした。

「若君は皇統に連なるお方なのです。若君のことをお知りになった主上は若君の数奇にお心を痛めておられます」
おかみ

そう語った少女の話によれば、若は冷泉天皇の皇子であるのとことだった。冷泉天皇は非常に容姿端麗な人物であるが精神の病があり、数々の奇行を残している。その奇行によって産まれたのが若であり、彼はまた父親である冷泉天皇の奇行によって贅として差し出されてしまったのであった。

都では、贅として捨てられた皇子の話が真実味のない物語として囁かれていた。しかし飛驒の深山に盗賊が逃げ込んだことにより、事態は急変したのである。皐月の夜、化生の棲む邸宅に迷い込んだ盗賊は食い尽くされてしまったが、盗賊を追っていた追捕使が飛驒の深山に異様な屋敷が存在していることを目撃していた。このことが朝廷に報告されて後一条天皇の耳に入り、冷泉天皇の皇子の話が俄かに真実味を帯びたのである。捨てられた皇子を哀れんだ後一条天皇は陰陽寮に勅命を下し、そして少女が飛驒の深山に派遣されたのであった。

天皇や都の仕組みについてまったく言っていないほど知識のない若には、やはり少女の話を理解することが出来なかった。ただ彼は、少女が己を連れて都へ行くつもりであることだけは察していた。しかしそのことを喜ばしいと感じるべきなのか、若には解らなかった

のである。若がどのような態度を取っていいのか分からずにいると、ひとまずの説明を終えた少女がそこで初めて表情を変えた。それまで精悍であった少女の面には微かな憐憫が滲んでおり、その意味が分からなかった若は狼狽する。若の困惑を察した少女は再び表情を消してから口火を切った。

「若君、私は勅命を果たすために貴方を都へお連れするつもりでした。ですが若君は、すでに人間ではなくなりつつあります」

少女の言葉に若の心臓は激しく脈打った。動悸に襲われた若は胸に手を当て、恐る恐る口唇を開く。

「そなたには私の行く末が見えているのか？」

「いいえ。私に見えているものは花です」

「花……？」

「腎臓に紅白の梅、腸に杜若、肝臓にあやめ、胃に山茶花、胆に椿。若君、化生に臓腑を与えられましたね？」

どの化生にどの臓腑を与えたのかまで言い当てられた若は閉口した。少女曰く、若の体内では失った臓腑の代わりに妖花が咲いているのだという。禍々しく毒々しいと吐き捨てた少女は嘆息してから言葉を次いだ。

「若君、五臓六腑を食い尽くされると貴方は人間ではなくなります。そのようなお方を主上の下へ連れて行くわけには参りませんので、都へ行くおつもりがあれば、若君には戦ってもらわなければなりません」

「戦う、とは？」

「自らの手で化生を滅し、失った臓腑を取り戻すのです」

「そのようなことが……」

化生を滅することが人間に可能なのかと、若は訝った。少女は小柄な体から自信を漲らせ、その点については頷いて見せる。しかしすぐ、彼女は再び哀れみの視線を若に向けた。

「若君、貴方は長く人間の世を離れていたお方です。いまさら人間の世に戻ることが若君にとって幸せなことであるのか、私には解り

かねます」

都では処世術が物を言う。それは長く人間の世を離れていた若には欠乏している要素であり、すぐに身に付くものでもない。そう説明した後、少女は同行者についても触れた。

「主上には御子がありません。藤原の者が直々に若君を拝見したいと申したのは何事かを謀っているのではないかとも思われます」

藤原の者と都へ行けば政争に巻き込まれる可能性があるのだと、少女は言っていた。だがこのまま飛驒の山中にいれば、若はいずれ人間ではなくなる。物の怪を退治することも陰陽師の仕事なので、少女は化生には容赦しない旨も若に告げた。

「……若君、これをお持ちください」

あらゆる道を塞がれてしまった若は言葉もなく立ち尽くしていたが、少女が何かを差し出したので我に返った。

「これは……？」

「陰陽師の使う札です。また師走に参りますので、その時までにお心を決めておいてください」

使い方を説明した後、少女は若の手に札を握らせると門を開けた。そこにはすでに黒猫と立烏帽子に札を貼り付けた男の姿があり、少女は若に屋敷へ戻るよう促す。半ば強引に敷居を跨がされた若は茫然としたまま背後を振り返り、そのまま少しずつ閉ざされていく扉をじっと見つめていた。

神無月、石路

時は平安、後一条天皇の御代。都のある山城から北東に位置する飛驒の深山に人目を忍ぶ邸宅があった。西対を省いた寝殿造りに住まうのは『若』と呼ばれる一人の青年。これは人間の男と美しき化生どもの織り成す夜伽の物語である。

日本全国の神が杵築大社きつきおおやしらに集う神無月のある夜、山の奥深くにひっそりと佇む邸宅で広廂ひろげさしに座り込んでいる青年は屋敷の南に広がる庭を見つめていた。直衣のうしに立烏帽子たてえぼしという出で立ちをしている青年は寝殿の主であり、彼は『若』と呼ばれる存在である。端正な面立ちの若は二十歳前後と思われるが、本当の年齢は当人も知らない。若という呼称も無論親から授かったものではなく、彼は自身の名さえ知らないのであった。

開放的な屋敷を吹き抜けていく風は冷たく、それはすでに冬のものであった。冷たい月明かりに照らされている南庭も寒々しく色彩を変えている。侘しい眺めの邸宅には鳥や獣さえも訪れることがないため、屋敷は今宵も静謐を保っていた。平素に比べればわずかに憂いを含んだ面持ちで庭に視線を注いでいた若は、不意に出現した女を認識して目を瞬かせる。突如として若の視界に入り込んだ彼女は重みを感じさせぬ足取りで寝殿へと歩み寄り、簀子すのこを伝って若の下にやって来た。

『若、お久しぶりにございます』

冷気に溶けてしまいそうなほど軽やかな声を発した女は、人型をしているが人間ではない。その証拠に小桂こうちぎを纏い、緋の袴を身につけた女の垂髪すいはつは月の色彩を盗んだような黄色であり、瞳の色は濃緑である。何より、彼女の体は背後にある風景を透かしているのだ。しかし彼女が人間ではないことなど大した問題ではなく、若は知己である女の名を呼んだ。

「石路つわぶきか」

若が口にした名称の通り、小桂を纏った女は石路の化生なのである。石路は若に向かってにこりと微笑み、形の良い口唇をわずかに開いた。

『若、お顔の色が優れませんわね。何か憂い事でもございますの？』
石路に的確な指摘をされた若は肝を冷やしたが、表面上は何事もないよう装いながら首を振る。

「少し、気分が優れないのだ。夜風が障ったのかもしれない」
『まあ、それは大変ですわ。若、今すぐお休みになってくださいまし』

歩く仕種をしながらも地に足を着いていなかった石路はふわりと空中を舞い、若を導くように寢殿へと泳ぎ出した。石路に誘われるまま、若は寢殿に戻って烏帽子を外す。彼は直衣のままで夜具に横たわろうとしたのだが、石路が制止するように声を上げた。

『若、受肉の許可をいただけませんか？』

石路が伺いを立てた受肉とは、触れることの叶わぬものから触れることが出来るものとなるよう肉体を得ることである。若が申し出を受け入れるとすぐ、石路の化生は畳へと降り立った。そうすることで石路の体は足元からゆっくりと、背後の風景を通さないものへと変わっていく。受肉を終えた石路は甲斐甲斐しく若の衣を剥ぎ取っていった。

「さあ、若。これでお休みになれますでしょう？」

石路は爛漫に笑ったが肌衣のみとなった若は身に染みる寒さを感じ

じていた。とつさの嘘が真になりそうだと内心で苦笑しながら、若は床に就く。石路は若の枕元に腰を落ち着けた。

「今宵は大陸のお話でもいたしましょうか」

石路がさっそく夜伽話を始めようとしたので若は静かな口調で彼女の言葉を遮った。

「大陸の話よりも都のことが聞きたい。頼めるか？」

若は確かに、最近まで大陸の話ばかりをせがんでいた。しかし今、彼が知らなければならないのは遠い大陸のことよりも都のことなのである。若がそう考えるに至ったにはある事情があったのだが、そのことを知らない石路は目を瞬かせた。

「都のお話、でございますか。若は大陸に興味がお有りなのかと思っていました」

「大陸にも興味がある。しかし私は、自身が暮らす国のことについてあまりにも無知なのだ」

「……左様でございますか。若がそう仰るのであれば、都のお話にいたしましょう」

石路は若の変心に些かの不審を感じたようであったが、そのことを改めて口にするようなことはしなかった。気分を変えるように表情を改めた石路は咲き誇る花の如き色香を漂わせながら横たわる若に美しい面を寄せる。

「若は都の、どのようなことがお知りになりたいのです？」

触れるだけの口づけの後、石路が囁くように問いかけてきた。若は女の気配を間近に感じながらも天井に視線を固定したまま淡々と応じる。

「都は、何故都なのだ？」

若は様々な化生から華やかな都の話聞いたことがあった。だが化生が語るのは都の佇まいや、その場所に暮らす人々のことである。都は何故、山城盆地に栄えているのか。そもそも都とは何なのか。そういった根本的な疑問を抱く若に答えをくれた者は今まで唯の一人もいなかったのである。若の疑問を受けた石路も姿勢を正して考

えこんでいたが、彼女はやがて口火を切った。

「都とは皇居のある土地のことです。人間の支配者がいる場所と思えばよろしいのではないでしょうか」

「人間の支配者……天皇という存在か」

「そうですわ」

「では何故、都は山城にあるのだ？」

「それは、遷都したからですわ」

「せんと、とは？」

「都を移すことです。山城に移る以前の都は長岡に、長岡より以前には大和にありました」

「都とは移るものであったか」

「……どうやら、若がお知りになりたいのは都というよりもこの国の歴史のようですわね」

石路が呆れたように呟いたので話にのめりこんでいた若は我に返った。若は床上から、見下ろしてくる石路の瞳をじっと見つめる。

「聞かせてもらえるか？ この国の歴史を」

石路はやや興醒め気味であったが、若が念を押すと簡単に頷いた。ただし簡略であることを前もって言い置き、石路は話を始める。

「人間は初め、石器を使って狩りをするという生活をしていました。そのうちに定住を始め、大陸から稲作が伝わると米を作り始めたのですわ。狩りをしていた頃は家族単位の小集団でしたが、稲作を始めてからは大きな集団になり、集落というものが生まれたのだそうです」

集落同士はやがて互いの利権を賭けて争うようになった。これが小国が生まれた起源である。集落の統合によって生まれた小国は各地に分立し、今度は小国同士が争うようになった。二世紀の終わりがくると小国同士の争いが激化して世が大変乱れたため、各国は共同で邪馬台国の卑弥呼を王として立てた。ここに邪馬台国を中心とする連合が生まれ、その後には大和の勢力を中心とするヤマト政権が成立するのである。大王を中心とするヤマト政権は徐々に支配体制を整

えていったが五世紀の初めに王統の断絶という危機を迎え、おうじん 応神天皇の五世孫と称する者を継体天皇けいたいとして即位させた。

継体天皇の死後、政權は分裂した。これの收拾にあたった蘇我氏が台頭し、時代は厩戸皇子うまやとのおうじ（聖徳太子）が活躍する推古朝すいこへと移って行くのである。その後は大化の改新を経て律令国家の形成に向かい、持統天皇じとうの治世中に藤原京へ遷都した。律令法によって定められた位階のうち五位以上の官人とその家族が貴族と呼ばれる者達である。

八世紀の初め、藤原京から平城京へ遷都。時の天皇が藤原不比等ふひとを重用したため、彼の子孫達によって藤原氏が栄華を極めていくのである。しかしその道のりは初めから順風満帆であったわけではなく、飢饉や疫病が続いたことで社会に不安が広がっていった。不比等の子達が流行り病で相次いで死去したため藤原氏は一時期衰退していたが、式家しきけ（不比等の三男である藤原宇合うまかいを祖とする家系）の百川ももかわが桓武天皇かんむを擁立したことにより息を吹き返す。桓武天皇は初め長岡京へ遷都したが不幸が相次いだため、山城国に新都を造営した。これが平安京であり、平安京への遷都から約四百年間を平安時代と呼ぶのである。

「山城へ遷都して後のことは、よく存じています。ですが少々、長話が過ぎるようですわね。今宵はこれまでにいたしましょう」

石路が話を切り上げたので若は考えを巡らせながら頷いた。石路が語った内容は若にとっては初めて耳にするものばかりであり、彼は頭を整理する時間が欲しいと思ったのである。しかし若の思考は、石路の冷たい口づけによって阻まれてしまった。

「わたくし、若の臍腑をいただきたいですわ」

愛を囁くように甘く、石路が欲望を露わにする。胸板を伝う爪の硬質さを感じた若はひやりとした。

「石路、先程も申したが体が思わしくないので。今宵は我慢をしてくれぬだろうか」

「そのようなことを仰られて……若はわたくし以外の輩に臍腑をお

与えになるのではありませんこと？」

あまり顧みられないことを拗ねているように、石路は甘える子供のような口調で食い下がる。すでに他の化生に臓腑を与えている若には、この石路の一言に返す言葉が見当たらなかった。若が為す術なく閉口すると、石路は彼の顔を覗き込んで微笑みを浮かべる。

「まあ、よろしいですわ。その代わり精気をくださいませ」

困惑顔は甘美な誘いであると独白を零し、石路は若に口唇を寄せ、石路に口唇を奪われた若は気力と体力を少しずつ彼女に吸い取られ、力なく臉を下ろしたのだった。

夜の闇が深かった時代、平安。これは化生とともに生きる一人の青年の夜伽の物語である。

霜月、山茶花

時は平安、後一条天皇の御代。都のある山城から北東に位置する飛驒の深山に人目を忍ぶ邸宅があった。西対を省いた寝殿造りに住まうのは『若』と呼ばれる一人の青年。これは人間の男と美しき化生どもの織り成す夜伽の物語である。

空から舞い落ちる花片雪が深々と降りしきる霜月の夜、山の奥深くにひっそりと佇む邸宅で寝殿の主である青年は床に就いたまま雪化粧の庭を眺めていた。血の気のない顔色をして横たわっている彼は『若』と呼ばれる人間である。若の瘦けた頬は新雪に劣らないほど白く、自らの意思で動かすことの難しい彼の体は二十歳前後の若者にしてはずいぶんと華奢であった。漆黒の瞳は虚ろではなかったが、庭を見据えていながらも心はその場所に留まっていけない様子である。しかし広廂に女が姿を現すと、若の瞳はそちらに向けられた。若の瞳が捉えた者は唐衣を纏った女房であった。彼女は黒髪に黒い瞳をしており、髪には淡紅色の花を差している。一見すると人間のようなのであるが、女房の顔立ちは見る者に一抹の不安さえ抱かせるほど整っていた。彼女は床に横たわったまま自身を見上げてきている若に完璧な微笑みを向け、それから形の良い口唇をゆっくりと開く。

「若が凍えてしまわぬようにと、炭をお持ちいたしました。伺いを

立てずに受肉いたしましたこと、お許しくださいませ」

女房が口にした『受肉』とは、化生が肉体を得ることである。その言葉の通り火鉢に炭を足している女房は人間に近しい姿をしてはいるが、その本質は化生なのであった。若は女房の垂髪すいはつに彩りを添えている山茶花さんかを一瞥し、小さく息を吐く。

若の元を訪れる化生の多くは彼に許しを請う形で受肉をする。しかし若は化生たちの主ではなく、ただの贅なのである。従って伺いを立てるといふ形式も戯れのようなものであり、山茶花が許しを得ずに受肉をしたからといって若には咎め立てをする謂れもなかった。「温かくなった。礼を言おう」

床にいるとはいえ寒さを感じていたのは事実だったので、若は山茶花に謝意を示した。山茶花の化生は美しく微笑み、若に寄り添って横たわる。訝しく思った若は首を傾け、己の顔が映るほど間近にある山茶花の瞳を見つめた。山茶花は触れるだけの口づけをした後、若の耳元に口唇を寄せる。

「若、私はもう待つことが出来ません。今宵こそ若を私だけのものに」

山茶花は甘えるような声で囁いたが、化生と共に生きる若にはそれが愛の囁きなどではないことが解っていた。わざわざ体を密着させて秘め事のように零した山茶花が本気であることを即座に理解した若はさっと青褪める。

この屋敷にいる化生は花々の化身である。化生たちはそれぞれの季節に花を咲かせると若の元を訪れるのだが、冬のこの時期は活動可能な者が少ない。山茶花はそれを見越して毎年、若に臍へそを強請ってきたのであった。しかも山茶花が一途なまでに欲しているのは若の心臓なのである。

「私、心の臓が一番の好物ですの。若の胃も美味でしたが、心の臓はどのような味がするのかしら」

山茶花が押さえつけるように圧しかかってきたので、とっさに体を起こした若は彼女の体を組み敷いて無我夢中で口唇を重ねた。し

かし体力・気力ともに消耗していた若はすぐに力尽き、下敷きにした山茶花に覆いかぶさる形で脱力する。己の肩口に収まった若の頭を優しく撫でながら、山茶花はくすくすと笑い声を漏らした。

「殿方に襲われるというのも、たまにはいいものですわね。若、このまま夜伽話などいかがですか？」

「……聞かせてくれ」

床に広がった山茶花の髪に埋もれながら若はくぐもった声で返事をした。山茶花は若の頭を己の胸の上に移動させ、若の髪に細い指を差し入れながら口唇を開く。

「若はどのようなことをお聞きになりたいですか？」

声を発してはいても、山茶花の胸は動くことがない。心音さえ聞こえない豊かな胸の中で瞼を下ろしながら、若は問いの答えを口にした。

「冷泉天皇とはどのような人物であったのか、聞かせてくれ」
れいぜい

「冷泉……ああ、よく覚えております」

冷泉天皇の御世は後一条天皇の治世中から見ると五十年ほど前のことである。しかし山茶花はすぐその名に思い至ったようで、皮肉げな口調で話を始めた。

「彼は非常に容姿端麗な人物でしたが氣狂いでした。自身が病に伏しているのに大声で歌を歌ったり、住んでいた場所が火事になった時も避難しながら歌っていましたわね。儀式の最中に冠を脱ぎ、近くにいた娘を姦したなどということもありました」

娘が姦されたと聞いた刹那、若はどきりとした。体を接しているため鼓動の変化が伝わったようで、山茶花が怪訝そうな声を上げる。

「若、どうかなさいましたか？」

「……いや」

短く言い置き、若は山茶花の胸から体を退けた。再び仰向けに転がった後、若は話を続けるよう山茶花を促す。しかし山茶花は少し困ったように苦笑した。

「冷泉という者に対して、これ以上お話するようなことはござい

ませんわ。若が奇行を具に知りたいたと仰られるのでしたら、お教えいたしますが」

「……そうか。もう、いい」

若は小さく息を吐き、やるせない気持ちを抱きながら目を閉ざした。

長月の夜、若の元を訪れた人間は冷泉天皇が若の実父であることを伝えた。顔を見たこともない冷泉という天皇が父親であるという実感はなかったものの、それでも父親であると言われている者の奇行を耳にすることは少々苦痛である。自身が父の奇行によって産まれ、父の奇行によって捨てられたと教えてくれた少女の顔を思い出した若は知らずのうちに嘆息を零していた。

「若、ご気分が優れませんか？」

山茶花が声をかけてきたことで我に返った若は次の問いを探した。会話を途切れさせてはならないと強く感じていた若は、とっさに現在の天皇について問いを重ねる。山茶花は忙しい若の様子を訝るでもなく、淡々と答えを口にした。

「現在の天皇は藤原氏の外孫です。叔母にあたる者を中宮としていて、他の妃はおりません。まだ跡継ぎは生まれていないようですわね」

「……そうか。子に恵まれぬとは不憫であるな」

「それは、どうなのでしょう。血の繋がりなど脆いものです」

若はどのような内容であれ会話を成立させようとしていたのだが、山茶花のこの一言には返す言葉がなかった。血を分けた者に捨てられた若自身が、山茶花の冷淡な言葉を体現しているからである。若が閉口したので添い寝をしていた山茶花が体を起こした。目前に再び端正な女の顔が据えられたので、若は慌てて体を起こすを試みる。しかしそれは山茶花に阻まれてしまい、若は床にべったりと背をつけた。

「私がどれほど貴方に恋焦がれているか、若は知らないのです」

それまで漆黒であった山茶花の瞳が剣呑な光を宿す。次第に朱へ

と変化していく山茶花の瞳に魅入られた若は寒気を感じ、圧しかか
つてきている女の体を跳ね除けようとした。だが化生の本性を露わ
にした山茶花が抵抗を許すはずもなく、首筋に口唇を押し付けられ
た若は脱力して腕を下ろす。ぐったりとした若の姿を見下ろした山
茶花は雅な笑みを浮かべた。

「若、私のものになってくださいまし」

山茶花はそう言い放つと、自身の顔の前で手を広げて見せた。先
程まで人間と同じ程度の長さであった彼女の爪が、瞬く間に伸びて
いく。精気を奪われた若にはもう抵抗する術がなく、彼は虚ろな瞳
で山茶花の動作を見つめていた。

淡紅色の山茶花の爪が、若の胸にゆっくりと沈んで行く。化生に
蹂躪されている時に痛みは感じないのだが、山茶花が臓器を取り出
すと途端に血が香った。臓器を片手にしている山茶花は空いている
手で髪に咲いている花をむしり取り、それを若の胸に沈めてから血
まみれの己の手に意識を注ぐ。取り出したばかりの新鮮な心臓はま
だ脈打っており、留まることのない鮮血が彼女の唐衣に染みこんで
いった。

「この滴り落ちる血の瑞々しさ。生命の息吹を感じますの」

山茶花は恍惚の表情で美しい面を心臓に寄せ、血管に沿うように
舌を這わる。口の周りを深紅に染めた彼女は貪るように血を啜り、
ゆっくりと時間をかけて惜しみながら若の心臓を食していった。ぼ
んやりと天井を見つめていた若は次第に痛み出した胸を押さえ、仰
向けに倒れた姿のまま力なく咳き込む。陸に上げられた魚のように
喘ぐ若の口唇からは淡紅色をした花びらが一片、零れて消えた。

夜の闇が深かった時代、平安。これは化生とともに生きる一人の
青年の夜伽の物語である。

師走、夜に口遊む

時は平安、後一条天皇の御代。都のある山城から北東に位置する飛驒の深山に人目を忍ぶ邸宅があった。西対を省いた寢殿造りに住まうのは『若』と呼ばれる人間の青年である。この屋敷には若の他に人間の姿はなく、彼は独りきりで暮らしていた。

降り積もった雪が月光に照らされて白銀に輝く師走の夜、若は寢殿を後にして屋敷の北東へ向かっていた。寢殿から渡殿を伝って東対へ行き、東対からさらに北へ向かい、簀子を下りる彼の足取りは些か急いているようである。新雪を踏みしめた若は足跡を残しながら歩を進め、北の外れに植えられている大木の前で足を止めた。若の目前では雪を被った櫟の大木が、重そうに枝を垂れさせながら佇んでいる。腕を回しても到底抱えきれないほど太い幹に触れた若は眉宇に憂いを滲ませた。滑らかな手触りをしている樹皮は硬く、まるで若の来訪を頑なに拒んでいるかのようである。若はしばらく幹に触れたまま黙っていたが、やがて彼は形の良い口唇を開いて言葉を紡ぎ出した。

「……乳母」

若の呟きはか細く、山奥の静寂にすぐ紛れてしまった。櫟は雪を落として反った枝を正常な位置へ戻すということをしたが、それは若の呼びかけへの対応ではなく自然な動きである。言葉を交わす相手のいない若は途方に暮れる思いで月下に立ち尽くしていた。

飛驒の山中に建てられた邸宅は貴族の住いと同様のものではあったが、この屋敷に棲んでいる者達は人間ではない。人間を食らう化生が蠢動する屋敷において、若は物心ついた時から贅として過ごしてきたのである。彼は先頃まで乳母の存在を失念していたのだが、ある出来事を契機に自身を育ててくれた女房のことを思い出した。会いたくてたまらない人物は、この櫟の内部にいるはずなのである。だが彼女は呼びかけに応えてはくれず、孤独に押し潰されそうにな

った若は櫛の幹に頬を寄せた。失念していたことに対する慙愧よりも、今はただ恋しさばかりが募って仕方がないのだ。

『わ……か……』

頬を寄せた幹から聞こえてきた微かな声に、若は弾かれたように面を上げた。しかし若の周囲には人影がなく、空中を漂う化生でさえ姿を見せてはいない。だが空耳だとは思えず、若は櫛に視線を戻して耳を澄ました。すると再び、今にも消え入りそうな女の声が若を呼ぶ。その声はやはり、太い幹の内側から聞こえてきているようであった。

「乳母……そこに、いるのか」

若が呼びかけると櫛の巨木は頷くように振動した。幹の一部が闇に吸い込まれるように消えて行き、若の目前に洞を出現させたところで櫛は沈黙する。若は躊躇うこともなく幹にできた空洞へと進入していった。

洞の内部には闇が広がっていた。樹木の内部と外界を繋いでいた洞は若が進入してすぐに消滅したため、彼は自身と闇の境界も分からないほどの深い暗色の海に身を委ねている。地に足についているのかも定かではない状態であったが、若は不安を感じてはいなかった。優しい闇は母胎のように彼を包み込んでいたのである。

『化生に心臓を、奪われたのですね』

闇の中に不意に、女の声が響き渡った。いくら周囲を見回しても姿は見えないが、その声は若の記憶に刻まれている乳母のものである。この乳母は若を手放す際、自身のことを忘れるよう彼に呪いをかけた。その呪いは若が化生に心臓を奪われた時に解ける仕組みになっていた、そのため霜月に心臓を奪われた彼は何年も失念していた乳母のことを思い出したのである。しかし若自身は、そのような事情があることなど露ほども知らなかった。

化生どもに血肉を与え、慰みものとなることが若の宿命であるが、少しでも長く人間でありたいのなら心臓を護れと、乳母は幼い彼に教えこんだのである。乳母の記憶は封じられていても彼女の教え

は若の内部でしっかりと息衝いており、彼は乳母の助言に従って日々を過ごしてきたのだ。それだけに記憶が戻った今、若は心臓を奪われたことが不安で仕方がなかった。

「心臓を化生に奪われると、どうなるのだ？」

姿の见えない相手と言葉を交わすには何処を見ていればいいのかわからず、若は空を仰ぎながら言葉を紡いだ。闇はどこまでも高く果てがない。下方と左右も同じく、漆黒はどこまでも続いていた。しかし何処からともなく、問いに答える乳母の声が聞こえてくる。『人間でないものに近付く、それだけのことです。ただ人間でなくなった後、従属させられる恐れがあります』

乳母の淡白な物言いを冷静に受け止めた若は安堵して口唇を結んだ。彼は生まれてから此の方、一度も自由であったことなどない。圧制され続けてきた若には従属と聞いても抵抗感はなく、むしろそれしきのことと済むのならばと、彼は安心してしまったのである。

『……若、』

何事かを呟きかけた乳母の声音には微かな憐憫が含まれていた。しかし乳母は続きを口にすることはせず、口調を明るくして話を変える。

『せっかくいらしたのですから、今宵は乳母に夜伽のお相手をさせていただきます』

思いがけない乳母から申し出に、若は喜んで頷いた。乳母の声に耳を澄ますため、若は闇の内部で目を閉じる。しばしの間を置いてから、乳母はゆっくりと夜伽話を語り出した。

『今は昔、とある貴族の娘がおりました。娘は都に住んでいたのですが、ある日、深い山中にひっそりと佇むお屋敷に居を移しました。年頃になった娘はそのお屋敷に嫁いだのです。そのお屋敷は立派な寝殿造りで、とても雅な南庭がございました。娘はすぐに新しいお屋敷を気に入りました。しかし娘の他には女房の姿もなく、お屋敷はとても静かだったのです』

そこまで語ったところで乳母は一度言葉を切った。若はすでに閉

ざしていた目を開けており、闇に溶けていて見ることの叶わない乳母の姿を無意識のうちに探している。乳母は淡々とした調子を崩さないまま話を続けた。

『お屋敷に嫁いで初めての夜、娘の元にとっても美しい青年が姿を現しました。娘は結婚相手のお顔を知りませんでした。目の美しい男性こそが契り^{ねや}を結ぶべきお相手であると思いました。そして娘は、その男性と闇を共にしたのです。しかし翌日には、また別の美しい男性が娘の元を訪れました。娘は幾人もの男性に望まれるがまま、肌を重ねたのです。そうした生活が続けるうちに、初めはとも健康であった娘は次第に病んでいきました』

乳母が何の話をしているのか、若にはもうはつきりと解っていた。だが容喙することは躊躇われ、若は開きかけた口唇を結ぶ。

『乳母のお話は、これで終わりです。若、どうぞ健やかに』

優しい微笑みが目に浮かぶほど柔らかな声音で、乳母は夜伽話を締め括った。乳母の気配が闇からも失せた刹那、若の視界は眩い光に閉ざされる。娘がどうなったのか訊けないまま、若は固く目を瞑った。

気がついた時、若は巨木の前で呆けたように立ち尽くしていた。櫓の幹にはもう洞もなく、屋敷は何事もなかったかのように静まり返っている。月光を反射した雪がきらきらと輝いており、目を焼かれた若は瞼を下ろした。しかし彼はすぐに目を開け、漆黒の瞳に月を映しながら形の良い口唇を開く。

いろはにほへと　ちりぬるを

わかよたれそ　つねならむ

うるのおくやま けふこえて

あさきゆめみし ぬひもせず

若が口遊んだ今様形式いまようしきの歌は、すべての仮名文字を使って作られている手習い歌である。若は乳母に習ったこの歌を、一言一句確かめるようにしながら繰り返し、繰り返し口遊む。若の歌声は澄んだ師走の空気に溶けてゆき、歌に含まれる無常観は侘しく雪の大地に沈んでいった。

間もなく大祓おおはらいを迎えようとしている師走のある日、雪を被った飛騨の山中に珍しき人間の姿があった。狩衣かりぎぬに立烏帽子たてえぼしという出で立ちの少女が見つめる先には山中に似つかわしくない広大な屋敷がある。真上に上っている太陽が雪を煌めかすため、少女は目を細めながら人気のない屋敷を見下ろしていた。

屋敷の中央にある寝殿からやがて、一羽の鳥が飛び立った。白い鳥は羽ばたきながら上昇し、屋敷の上空を旋回したのち少女の元へとやって来る。少女は腕を差し出して鳥を止まらせ、その足に目を注いだ。しかし鳥の足には文がついておらず、少女は小さく息を吐く。微かに表情を曇らせた少女は眼下の屋敷へと視線を転じたが、

すぐ真顔に戻った。表情を消した少女は腕を振り、鳥を払う。すると鳥は一枚の札となって空中を漂った。宙を舞う呪符を回収した後、少女は屋敷に背を向ける。その後は振り返ることもなく、狩衣姿の少女は雪の山中に姿を消したのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3095i/>

夜伽草子

2010年10月8日13時39分発行